

第一則	武帝問達磨.....	4
第二則	趙州至道無難.....	5
第三則	馬大師不安.....	6
第四則	德山挾複子.....	7
第五則	雪峰盡大地.....	8
第六則	雲門十五日.....	9
第七則	法眼答慧超.....	10
第八則	翠巖夏末示衆.....	11
第九則	趙州東西南北.....	12
第十則	睦州問僧甚處.....	13
第十一則	黃檗酒糟漢.....	14
第十二則	洞山麻三斤.....	15
第十三則	巴陵銀碗裏.....	16
第十四則	雲門對一說.....	17
第十五則	雲門倒一說.....	18
第十六則	鏡清草裏漢.....	19
第十七則	香林西來意.....	20
第十八則	肅宗請塔樣.....	21
第十九則	俱胝指頭禪.....	22
第二十則	龍牙西來意.....	23
第二十一則	智門蓮華荷葉.....	24
第二十二則	雪峰龍鼻蛇.....	25
第二十三則	保福妙峰頂.....	26
第二十四則	劉鐵磨臺山.....	27
第二十五則	蓮華菴主不住.....	28
第二十六則	百丈奇特事.....	29
第二十七則	雲門體露金風.....	30
第二十八則	涅槃和尚諸聖.....	31
第二十九則	大隋劫火洞然.....	32
第三十則	趙州大蘿蔔.....	33

第三十一則	麻谷振錫遶床.....	34
第三十二則	臨濟佛法大意.....	35
第三十三則	陳尚書看資福.....	36
第三十四則	仰山問甚處來.....	37
第三十五則	文殊前三三.....	38
第三十六則	長沙一日遊山.....	39
第三十七則	盤山三界無法.....	40
第三十八則	風穴鐵牛機.....	41
第三十九則	雲門金毛獅子.....	42
第四十則	南泉如相似.....	43
第四十一則	趙州大死底人.....	44
第四十二則	龐居士好雪片片.....	45
第四十三則	洞山寒暑迴避.....	46
第四十四則	禾山解打鼓.....	47
第四十五則	趙州萬法歸一.....	48
第四十六則	鏡清雨滴聲.....	49
第四十七則	雲門六不收.....	50
第四十八則	王太傅煎茶.....	51
第四十九則	三聖以何爲食.....	52
第五十則	雲門塵塵三昧.....	53
第五十一則	雪峰是什麼.....	54
第五十二則	趙州石橋略約.....	55
第五十三則	馬大師野鴨子.....	56
第五十四則	雲門近離甚處.....	57
第五十五則	道吾漸源弔孝.....	58
第五十六則	欽山一鑊破三關.....	59
第五十七則	趙州至道無難.....	60
第五十八則	趙州時人窠窟.....	61
第五十九則	趙州唯嫌揀擇.....	62
第六十則	雲門拄杖子.....	63
第六十一則	風穴若立一塵.....	64

第六十二則	雲門中有一寶.....	65
第六十三則	南泉兩堂爭猫.....	66
第六十四則	南泉問趙州.....	67
第六十五則	外道問佛有無.....	68
第六十六則	巖頭什麼處來.....	69
第六十七則	梁武帝請講經.....	70
第六十八則	仰山問三聖.....	71
第六十九則	南泉拜忠國師.....	72
第七十則	潞山侍立百丈.....	73
第七十一則	百丈併却咽喉.....	74
第七十二則	百丈問雲巖.....	75
第七十三則	馬大師四句百非.....	76
第七十四則	金牛和尚呵呵笑.....	77
第七十五則	烏臼問法道.....	78
第七十六則	丹霞問甚麼來.....	79
第七十七則	雲門答餠餅.....	80
第七十八則	十六開士入浴.....	81
第七十九則	投子一切聲.....	82
第八十則	趙州孩子六識.....	83
第八十一則	藥山射塵中塵.....	84
第八十二則	大龍堅固法身.....	85
第八十三則	雲門露柱相交.....	86
第八十四則	維摩不二法門.....	87
第八十五則	桐峰庵主大蟲.....	88
第八十六則	雲門有光明在.....	89
第八十七則	雲門藥病相治.....	90
第八十八則	玄沙接物利生.....	91
第八十九則	雲巖問道吾手眼.....	92
第九十則	智門般若體.....	93
第九十一則	鹽官犀牛扇子.....	94
第九十二則	世尊一日陞座.....	95

第九十三則	大光師作舞.....	96
第九十四則	楞嚴經若見不見.....	97
第九十五則	長慶有三毒.....	98
第九十六則	趙州三轉語.....	99
第九十七則	金剛經輕賤.....	101
第九十八則	天平和尚兩錯.....	102
第九十九則	肅宗十身調御.....	103
第百則	巴陵吹毛劍.....	104

第一則 武帝問達磨

垂示に云く、山を隔て煙を見て、早く是れ火なることを知り、牆を隔て角を見て、便ち是れ牛なることを知る。舉一明三、目機銖兩、是れ衲僧家尋常の茶飯。衆流を截斷するに至ては、東涌西沒、逆順縱横、與奪自在なり。正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。雪竇の葛藤を看取よ。

舉す。梁の武帝、達磨大師に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰そ。磨云く、不識。帝契はず。達磨遂に江を渡て魏に至る。帝後に舉して志公に問ふ。志公云く、陛下還て此の人を識るや否や。帝云く、不識。志公云く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。帝悔ひて遂に使を遣して去って請せんとす。志公云く、道ふこと莫れ陛下使を發し去って取らしめんと。闔國の人去るも、他亦回らず。

聖諦廓然、何當辨的。
對朕者誰、還云不識。
因茲暗渡江、豈免生荊棘。
闔國人追不再來、千古萬古空相憶。
休相憶、清風匝地有何極。
師顧視左右云、這裏還有祖師麼。
自云、有。
喚來與老僧洗脚。

聖諦廓然、何ぞ當に的を辨すべき。朕に對する者は誰そ。還て云はく不識と。茲に因て暗に江を渡る、豈に荊棘を生ずることを免れんや。闔國の人追へども再來せず、千古萬古空しく相ひ憶ふ。相ひ憶ふことを休めよ、清風匝地何の極まりか有らん。師左右を顧視して云く、這裏還て祖師有りや。自ら云く、有り。喚び來せ老僧が與め洗脚せしめん。

第二則 趙州至道無難

垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。直饒、棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たるも、也た未だ向上宗乗中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知す可し。歴代の祖師も、全提不起。一大藏教も、詮注し及ばず。明眼の衲僧も、自救不了。這裡に到て作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥滯水。箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶。久參の上士は、之を言ふを待たず。後學初機は、直に須く究取すべし。

擧す。趙州衆に示して云く、至道無難、唯嫌揀擇。纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず。是れ汝還て護惜すや也た無や。時に僧有り問ふ、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。州云く、我れも亦知らず。僧云く、和尚既に知らずんば什麼としてか却て明白裏に在らずと道ふ。州云く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了て退け。

至道無難、言端語端。
一有多種、二無兩般。
天際日上月下、
檻前山深水寒。
觸髅識盡喜何立、
枯木龍吟銷未乾。
難難。
揀擇明白、君自看。

至道無難、言端語端。
一に多種有り、二に兩般無し。
天際日上り月下る、
檻前山深く水寒し。
觸髅識盡きて喜何ぞ立せん、
枯木龍吟銷して未だ乾かず。
難難。
揀擇明白君自ら看よ。

第三則 馬大師不安

垂示に云く、一機一境、一言一句に且く箇の入處有らんと圖れば、好肉上に瘡を剝り、窠を成し窟を成す。大用現前、軌則を存せず、且く向上の事有ることを知らんと圖れば、蓋天蓋地、又た模索不着。恁麼も也た得し、太だ廉纖生。恁麼も也た得からず、不恁麼も也た得からず、太だ孤危生。二途に涉らず、如何にすれば即ち是ならん。請う試に舉し看ん。

舉す。馬大師安らかならず。院主問う、和尚、近日尊候如何。大師曰く、日面佛、月面佛。

日面佛、月面佛。
五帝三皇是何物。
二十年來曾苦辛、
爲君幾下蒼龍窟。
屈。
堪述。
明眼衲僧莫輕忽。

日面佛、月面佛。五帝三皇、是れ何物ぞ。二十年來曾て苦辛し、君が爲に幾か蒼龍の窟に下る。屈。述ぶるに堪えんや。明眼の衲僧も輕忽にすること莫れ。

第四則 徳山挾複子

垂示に云く、青天白日、更に東を指し西を劃すべからず。時節因縁、亦た須らく病に應じて藥を與うべし。且く道え、放行するが好きか、把定するが好きか。試みに舉し見ん。

舉す。徳山、瀧山に到る。複子を挾んで法堂上を、東より西に過り、西より東に過り、顧視して無、無と云って便ち出づ。雪竇著語して云く、勘破し了れり。徳山、門首に至り、却って云く、也た草草にするは得からずと。便ち威儀を具え、再び入って相見す。瀧山坐りおる次、徳山、坐具を提起して云く、和尚。瀧山拂子を取らんと擬。徳山便ち喝して、袖を拂って出づ。雪竇著語して云く、勘破し了れり。徳山法堂に背却けて、草鞋を著けて便ち行く。瀧山、晩に至って首座に問う、適來の新到、什麼處にか在る。首座云く、當時、法堂を背却け、草鞋を著けて出で去れり。瀧山云く、此の子、已後孤峰頂上に向いて草庵を盤結え、佛を呵り祖を罵り去らん在。雪竇著語して云く、雪の上に霜を加う。

一勘破、二勘破。
雪上加霜曾嶮墮。
飛騎將軍入虜庭、
再得完全能幾箇。
急走過、不放過。
孤峰頂上草裏坐。
咄。

一たび勘破し、二たび勘破す。雪の上に霜を加え曾て嶮墮す。飛騎將軍虜庭に入る、再び完全し得るは能く幾箇ぞ。急て走過らんとするも、放過せず。孤峰頂上草裏に坐す。咄。

第五則 雪峰盡大地

垂示に云く、大凡そ宗教を扶堅すには、須是らく英靈底漠にして人を殺すに眨眼もせざる底の手脚あって、方めて立地に成佛すべし。所以て照用同時、卷舒齊しく唱え、理事不二、権實並び行わる。一著を放過するは、第二義門を建立す。直下と葛藤を截斷せば、後學初機は、湊泊を爲し難し。昨日も恁麼なるは事已むことを得ざるも、今日も又た恁麼なるは、罪過天に彌つ。若是明眼の漠ならば、一點も他を謾るを得ず。其れ或は未だ然らざるも、虎口の裏に身を横たうれば、喪身失命を免れず。試に舉し看ん。

舉す。雪峰、衆に示して云く、盡大地撮み來れば、粟米粒如の大きさなり。面前に抛向すも、漆桶にして會せざらん。鼓を打って普請し看よと。

牛頭沒、馬頭回。
曹溪鏡裏絶塵埃。
打鼓看來君不見、
百花春至爲誰開。

牛頭沒れ、馬頭回る。曹溪の鏡裏塵埃を絶す。鼓を打ち看來たるも君見ず、百花春至って誰が爲めにか開く。

第六則 雲門十五日

舉す。雲門垂語して云く、十五日已前は汝に問はず、十五日已後、一句を道い將ち來れ。自ら代って云く、日日是れ好日。

去却一、拈得七。
上下四維無等匹。
徐行踏斷流水聲、
縱觀寫出飛禽跡。
草茸茸、煙羃羃。
空生巖畔花狼藉。
彈指堪悲舜若多。
莫動著。動著三十棒。

一を去却り、七を拈得す。上下四維に等匹無し。徐に行きて踏斷く流水の聲、縦に觀て寫き出す飛禽の跡。草は茸茸、煙は羃羃。空生の巖畔花狼藉たり。彈指して悲しむに堪えたり舜若多。動著くこと莫れ。動著かば三十棒せん。

第七則 法眼答慧超

垂示に云く、聲前の一句は、千聖も傳えず。未だ曾て親しく觀ざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に辨得して、天下の人の舌頭を截斷するも、亦た未だ是れ性燥の漠にあらず。所以に道う、天も蓋う能わず、地も載する能はずと。虚空も容るる能わず、日月も照す能わずと。佛無き處に獨り尊と稱して、始めて較うこと些子なり。其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に透得し、大光明を放って、七縱八横、法に於て自在自由にして、手に信せて拈じ來るに、不是あること無し。且く道え、箇の什麼を得てか、此の如く奇特たる。復た云く、大衆會すや。従前の汗馬人の識る無し、只だ重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。即今の事は且く致く、雪竇の公案、又た作麼生。下文を看取よ。

擧す。僧、法眼に問う、慧超、和尚に咨う、如何なるか是れ佛。法眼云く、汝は是れ慧超。

江國春風吹不起、
鷓鴣啼在深花裏。
三級浪高魚化龍、
癡人猶辱夜塘水。

江國の春風吹き起らず、鷓鴣啼いて深花裏に在り。三級の浪高くして魚は龍と化せるに、癡人猶お辱む夜塘の水。

第八則 翠巖夏末示衆

垂示に云く、會すれば途中受用、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざれば世諦流布、羝羊藩に觸れ、株を守って兎を待つ。有る時の一句は、踞地獅子の如く、有る時の一句は、金剛王寶劔の如く、有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷し、有る時の一句は、波に隨い浪を逐う。若也途中受用ならば、知音に遇いて機宜を別ち休咎を識り、相共に證明せん。若也世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。所以に道う、大用現前して軌則を存せず。有る時は一莖の草を將て丈六の金身の用を作し、有る時は丈六の金身を將て一莖の草の用を作す、と。且く道え、箇の什麼の道理にか憑る。還て委悉すや。試みに舉し看ん。

舉す。翠巖、夏末に衆に示して云く、一夏以來、兄弟の爲めに説話す。看よ、翠巖が眉毛在りや。保福云く、賊と作す人は心虚なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、關。

翠巖示徒、千古無對。
關字相酬、失錢遭罪。
潦倒保福、抑揚難得。
嘮嘮翠巖、分明是賊。
白圭無玷、誰辨眞假。
長慶相諳、眉毛生也。

翠巖、徒に示せるは、千古に對無し。關字もて相酬ゆるは、錢を失い罪に遭う。潦倒たる保福は、抑揚得難し。嘮嘮たる翠巖は、分明に是れ賊。白圭玷無し、誰か眞假を辨ぜん。長慶相諳んじ、眉毛生ぜり、と。

第九則 趙州東西南北

垂示に云く、明鏡臺に當りて、妍醜自ら辨ず。鑢錙手に在りて、殺活時に臨む。漢去り胡來たり、胡來たり漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道え、這裏に到って又た作麼生。若し透關底眼、轉身の處無くんば、這裏に到って灼然に奈何ともならず。且く道え、如何なるか是れ透關底眼、轉身の處。試みに舉し看ん。

舉す。僧、趙州に問う、如何なるか是れ趙州。州云く、東門、西門、南門、北門。

句裏呈機劈面來、
爍迦羅眼絶纖埃。
東西南北門相對、
無限輪鎚擊不開。

句の裏に機を呈して劈面から來たり、爍迦羅眼、纖埃を絶す。東西南北の門相對して、限り無く鎚を輪すも撃ち開けられず。

第十則 睦州問僧甚處

垂示に云く、恁麼恁麼、恁麼ならず恁麼ならず。若し論戰せば、箇箇轉處に立在たん。所以に道う、若し向上に轉じ去らば、直得は、釋迦、彌勒、文殊、普賢、千聖萬聖、天下の宗師も、普く皆な氣を飲み聲を呑まん。若し向下に轉じ去らば、醯鷄蠅蠹、蠢動含靈、一一大光明を放って、一一壁立萬仞ならん。儻或不上不下ならば、又た作麼生か商量せん。條有れば條に攀り、條無ければ例に攀る。試みに舉し看ん。

舉す。睦州、僧に問う、近ごろ甚處を離れしや。僧便ち喝す。州云く、老僧汝に一喝せらる。僧又た喝す。州云く、三喝四喝の後作麼生。僧無語。州便ち打って云く、這の掠虛頭の漢。

兩喝與三喝、作者知機變。
若謂騎虎頭、二俱成瞎漢。
誰瞎漢。
拈來天下與人看。

兩喝と三喝と、作者は機變を知る。若し虎の頭に騎ると謂わば、二り俱に瞎漢と成らん。誰か瞎漢なる。拈じ來たりて天下に人の與に看せしむ。

第十一則 黄檗酒糟漢

垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑き一句一言も群を驚かし衆を動かし、一機一境は鎖を打ち枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提す。且く道え、什麼人か曾て恁麼にし來たる。還た落處を知るもの有りや。試みに舉し看ん。

舉す。黄檗、衆に示して云く、汝等諸人、盡く是れ噇酒糟の漢なり。恁麼に行脚せば、何處にか今日あらん。還た大唐國裏に禪師無きことを知るや。時に僧あり出でて云く、只だ諸方の徒を匡し衆を領いるが如きは、又た作麼生。檗云く、禪無しとは道ず、只是れ師無し。

凜凜孤風不自誇、
端居寰海定龍蛇。
大中天子曾輕觸、
三度親遭弄爪牙。

凜凜たる孤風自ら誇らず、寰海に端居して龍蛇を定む。大中天子曾て輕觸して、三度親しく爪牙を弄するに遭う。

第十二則 洞山麻三斤

垂示に云く、殺人刀、活人劍は、乃ち上古の風規にして、亦た今時の樞要なり。若し殺を論ぜば、一毫も傷つけず。若し活を論ぜば、喪身失命す。所以に道う、向上の一路は千聖すら傳えず。學ぶ者の形を勞すること、猿の影を捉えんとするが如し。且く道え、既是に傳えずんば、爲什麼にか却って許多の葛藤公案ある。具眼の者は、試みに説き看よ。

舉す。僧、洞山に問う、如何なるか是れ佛、山云く、麻三斤。

金烏急、玉兔速。
善應何曾有輕觸。
展事投機見洞山、
跛鼈盲龜入空谷。
花簇簇、錦簇簇、
南地竹兮北地木。
因思長慶陸大夫、
解道合笑不合哭。
咦。

金烏急く、玉兔速し。善く應ず何ぞ曾て輕觸有らん。展事投機に洞山を見る、跛鼈盲龜は空谷に入る。花簇簇、錦簇簇、南地の竹、北地の木。因って思う、長慶と陸大夫、解くぞ道えり、笑ふ合し、哭く合からずと。咦。

第十三則 巴陵銀碗裏

垂示に云く、雲大野に凝れば、徧界藏れず。雪蘆花を覆えば、朕迹を分け難し。冷たき處は氷雪よりも冷たく、細かき處は米末よりも細かなり。深深たる處は佛眼も窺い難く、密密たる處は魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且く止く、天下の人の舌頭を坐斷して。作麼生か道わん。且く道え、是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。僧、巴陵に問う、如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、銀碗裏に雪を盛る。

老新開、端的別、
解道銀碗裏盛雪。
九十六箇應自知、
不知却問天邊月。
提婆宗、提婆宗、
赤幡之下起清風。

老新開。端的に別なり、解くぞ道えり、銀碗裏に雪を盛ると。九十六箇應に自知すべし、知らずんば却って天邊の月に問え。提婆宗、提婆宗、赤幡の下清風を起す。

第十四則 雲門對一說

舉す。僧、雲門に問う、如何なるか是れ一代時教。雲門云く、對一說。

對一說、太孤絶。
無孔鐵鎚重下楔。
閻浮樹下笑呵呵、
昨夜驪龍拗角折。
別、別。
韶陽老人得一橛。

對一說、ただ孤絶。無孔の鐵鎚重ねて楔を下す。閻浮樹下笑うこと呵呵、昨夜驪龍角を拗し折らる。別なり、別なり。韶陽老人一橛を得たり。

第十五則 雲門倒一説

垂示に云く、殺人刀、活人劍は乃ち上古の風規にして、是れ今時の樞要なり。且く道え、如今那箇か是れ殺人刀、活人劍。試みに舉し看ん。

舉す。僧、雲門に問う、是れ目前の機にあらず、亦た目前の事にも非ざる時は如何。門云く、倒一説。

倒一説、分一節。
同死同生爲君訣。
八萬四千非鳳毛、
三十三人入虎穴。
別、別。
擾擾忽忽水裏月。

倒一説、分一節。同死同生君が爲めに訣す。八萬四千は鳳毛に非ず、三十三人虎穴に入る。別なり、別なり。擾擾忽忽たり水裏の月。

第十六則 鏡清草裏漢

垂示に云く、道に横徑無ければ、立つ者は孤危なり。法は見聞に非ず、言思迴かに絶つ。若し能く荆棘の林を透過し、佛祖の縛を解開ちて、箇の穩密の田地を得ば、諸天も花を捧ぐるに路無く、外道も潜かに窺うに門無けん。終日行じて未だ嘗て行ぜず、終日説いて未だ嘗て説かずして、便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用うべし。直饒恁麼なるも、更に須らく建化門中、一手擡、一手搦有ることを知るも、猶お些子く較えり。若是本分事の上ならば、且得沒交渉。作麼生か是れ本分事。試みに擧し看ん。

擧す。僧、鏡清に問う、學人啐す、請う師啄せよ。清云く、還た活くるを得るや也無。僧云く、若し活きずんば、人に怪笑われん。清云く、也た是れ草裏の漢。

古佛有家風、
對揚遭貶剥。
子母不相知、
是誰同啐啄。
啄、覺、
猶在殻、重遭撲。
天下衲僧徒名邈。

古佛に家風有り、對揚するや貶剥に遭う。子と母と相知らず、是れ誰か同じく啐啄す。啄されて、覺くも、猶お殻に在り、重ねて撲に遭ふ。天下の衲僧徒に名邈す。

第十七則 香林西來意

垂示に云く、釘を斬り鐵を截つて、始めて本分の宗師たるべし。箭を避け刀に隈るれば、焉んぞ能く通方の作者たらん。針割不入の所は則ち且く置く、白浪滔天の時如何。試みに舉し看ん。

舉す。僧香林に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。林云く、坐久成勞。

一箇兩箇千萬箇、
脱却箆頭卸角駄。
左轉右轉隨後來、
紫胡要打劉鐵磨。

一箇兩箇千萬箇、箆頭を脱却し角駄を卸す。左轉右轉するも隨後に來たり、紫胡は劉鐵磨を打たんと要す。

第十八則 肅宗請塔様

舉す。肅宗皇帝忠國師に問う、百年の後、須むる所は何物ぞ。國師云く、老僧の與に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、師の塔様を請う。國師良久して云く、會すや。帝云く、會せず。國師云く、吾れに付法の弟子の耽源なるものあり、却って此の事を諳る。請う詔して之に問え。國師遷化の後、帝、耽源に詔して、此意如何と問う。源云く、湘の南、潭の北。雪竇著語して云く、獨掌浪りに鳴らず。中に黄金有って一國に充つ。雪竇著語して云く、山形の拄杖子。無影樹下の合同船。雪竇著語して云く、海は晏やか河は清む。瑠璃殿上に知識無し。雪竇著語して云く、拈じ了れり。

無縫塔、見還難。
澄潭不許蒼龍蟠。
層落落、影團團。
千古萬古與人看。

無縫塔、見ること還って難し。澄潭には許さず蒼龍の蟠るを。層落落、影團團。千古萬古人の與に看せしむ。

第十九則 俱胝指頭禪

垂示に云く、一塵舉つて大地收まり、一花開いて世界起る。只だ塵未だ舉らず、花未だ開かざる時の如きは、如何か眼を著けん。所以に道
う、一綆絲を斬るが如し、一斬すれば一切斬。一綆絲を染るが如し、一染すれば一切洗と。只だ如今便ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を
運出せば、高低普く應じ、前後差うこと無く、各各現成せん。儻或未だ然らずんば、下文を看取よ。

舉す。俱胝和尚、凡そ所問あれば、只だ一指を豎つ。

對揚深愛老俱胝、
宇宙空來更有誰。
曾向滄溟下浮木、
夜濤相共接盲龜。

對揚深く愛す老俱胝、宇宙空じ來って更に誰か有る。曾て滄溟に浮木を下して、夜濤相共に盲龜を接す。

第二十則 龍牙西來意

垂示に云く、堆山積嶽。撞牆磕壁。佇思停機するは、一場の苦屈なり。或は箇の漢有って出で來たり、大海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虚空を打破して、直下に一機一境に向いて、天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍る處無からん。且く道え、從上來是れ什麼人が曾て恁麼なる。試みに舉し看ん。

舉す。龍牙、翠微に問う、如何なるか是れ祖師西來意。微云く、我が與に禪板を過ち來たれ。牙、禪板を過して翠微に與う。微、接得りて便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任すも要且つ祖師西來意無し。牙、又た臨濟に問う、如何なるか是れ祖師西來意。濟云く、我が與に蒲團を過ち來たれ。牙、蒲團を取って臨濟に過與す。濟、接得りて便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任すも要且つ祖師西來意無し。

龍牙山裏龍無眼、
死水何曾振古風。
禪板蒲團不能用、
只應分付與盧公。

龍牙山裏、龍に眼無し、死水何ぞ曾て古風を振わん。禪板蒲團用うる事能はず、只だ應に分付して盧公に與うべし。

這の老漢を也た未だ勦絶し得ずと、復た一頌を成す。

盧公に付し了るも亦た何ぞ憑らん、坐倚して將て祖燈を繼ぐことを休めよ。對するに堪す、暮雲の歸つて未だ合せず、遠山限り無く碧層層たり。

第二十一則 智門蓮華荷葉

垂示に云く、法幢を建て宗旨を立つるは、錦上に華を舗く。籠頭を脱し角駄を卸すは、太平の時節。或若格外の句を辨得せば、舉一明三。其れ或は未だ然らずんば、依舊伏して處分を聽え。

舉す。僧、智門に問う、蓮花未だ水を出でざる時如何。智門云く、蓮花。僧云く、水を出て後如何。門云く、荷葉。

蓮花荷葉報君知、
出水何如未出時。
江北江南問王老、
一狐疑了一狐疑。

蓮花、荷葉と、君に報じて知らしむ、水を出づるは未だ出でざる時に何如。江北江南、王老に問うて、一狐疑い了って一狐疑う。

第二十二則 雪峰鼈鼻蛇

垂示に云く、大方外無く、細なること隣虚の若し。擒縦他に非ず、卷舒我に在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑み、人人、要津を坐斷し、箇箇、壁立千仞なるべし。且く道え、是れ什麼人の境界ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。雪峰、衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇あり。汝等諸人、切に須らく好く看るべし。長慶云く、今日、堂中にて大に人の喪身失命する有り。僧、玄沙に舉似す。玄沙云く、須是らく稜兄にして始めて得し。此の如くなりと雖然も、我は即ち恁麼にせず。僧云く、和尚作麼生。玄沙云く、南山を用て什麼か作ん。雲門拄杖を以て雪峰の面前に擲向けて、怕るる勢を作す。

象骨巖高人不到、
到者須是弄蛇手。
稜師備師不奈何、
喪身失命有多少。
韶陽知、重撥草、
南北東西無處討。
忽然突出拄杖頭。
拋對雪峰大張口。
大張口兮同閃電、
剔起眉毛還不見。
如今藏在乳峰前、
來者一一看方便。
師高聲喝云、看脚下。

象骨は巖高くして人到らず、到る者は須是らく弄蛇手なるべし。稜師、備師、奈何ともせず、喪身失命するもの多少か有る。韶陽は知り、重ねて草を撥う、南北東西討ぬるに處無し。忽然と拄杖頭を突き出し。雪峰に拋對げて大いに口を張く。大いに口を張くや閃電に同じ、眉毛を剔起するも還た見えず。如今、乳峰の前に藏在す、來たる者は一一方便するを看よ。師、高聲に喝して云く、脚下を看よ。

第二十三則 保福妙峰頂

垂示に云く、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劔は毛を將て試み、水は杖を將て試む。衲僧門下に至っては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶に深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道え、什麼を將てか試みん。請う舉し看ん。

舉す。保福と長慶と、山に遊びし次、福、手を以て指して云く、只だ這裏こそは便ち是れ妙峰頂。慶云く、是なることは則ち是なるも、可惜許。雪竇著語して云く、今日這の漢と共に山に遊ばば、箇の什麼をか圖らん。復た云く、百千年後も無しとは道わず、只だ是れ少なり。後に鏡清に舉似す。清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏の野に遍きを見ん。

妙峰孤頂草離離、
拈得分明付與誰。
不是孫公辨端的、
髑髏著地幾人知。

妙峰孤頂、草離離たり、拈得して分明に誰にか付與えん。是れ孫公の端的を辨ずるにあらずんば、髑髏の地に著くを幾人か知らん。

第二十四則 劉鐵磨臺山

垂示に云く、高高たる峰頂に立てば、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行けば、佛眼も覷れども見えず。直饒眼は流星の似く、機は掣電の如くなるも、未だ免れず靈龜尾を曳くことを。這裏に到って、合に作麼生なるべき。試みに舉し看ん。

舉す。劉鐵磨、瀉山に到る。山云く、老牯牛、汝來たれり。磨云く、來日、臺山に大會齋あり、和尚還た去くや。瀉山身を放って臥す。磨便ち出で去る。

曾騎鐵馬入重城、
勅下傳聞六國清。
猶握金鞭問歸客、
夜深誰共御街行。

曾て鐵馬に騎って重城に入るも、勅下って傳聞し六國清し。猶お金鞭を握って歸客に問う、夜深けて誰と共に御街を行かん、と。

第二十五則 蓮華菴主不住

垂示に云く、機、位を離れざれば、毒海に墮在つ。語、群を驚かさずんば、流俗に陷る。忽若擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨ぜば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。還た恁麼の時節有ることを知るや。試みに舉し看ん。

舉す。蓮華峰菴主、拄杖を拈じて衆に示して云く、古人這裏に到って、爲什麼にか住すること肯ぜざる。衆、無語。自ら代って云く、他の途路に力を得ざりしが爲なり。復た云く、畢竟如何。又た自ら代って云く、榔標横に擔って人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。

眼裏塵沙耳裏土、
千峰萬峰不肯住。
落花流水太茫茫、
剔起眉毛何處去。

眼裏の塵沙、耳裏の土、千峰萬峰住することを肯せず。落花流水ただ茫茫たり、眉毛を剔起して何處にか去く。

第二十六則 百丈奇特事

舉す。僧、百丈に問う、如何なるか是れ奇特の事。丈云く、獨り大雄峰に坐す。僧、禮拜す。丈、便ち打つ。

祖域交馳天馬駒、
化門舒卷不同途。
電光石火存機變、
堪笑人來捋虎鬚。

祖域交馳す天馬の駒、化門舒卷して途を同じくせず。電光石火、機變を存す。笑うに堪えたり人の來たりて虎鬚を捋くは。

第二十七則 雲門體露金風

垂示に云く、一を問えば十を答え、一を擧すれば三を明らめ、兎を見ては鷹を放ち、風に因って火を吹く。眉毛を惜しまざることは則ち且く置く。只だ虎穴に入る時の如きは如何。試みに擧し看ん。

擧す。僧、雲門に問う、樹凋み葉落つる時、如何。雲門云く、體露金風。

問既有宗、
答亦攸同。
三句可辨、
一鏃遼空。
大野兮涼颼颼、
長天兮疎雨濛濛。
君不見、
少林久坐未歸客、
靜依熊耳一叢叢。

問に既に宗有り、答えも亦た同じき攸。三句辨ずべし、一鏃空に遼なり。
大野は涼颼颼たり、長天は疎雨濛濛たり。君見ずや、少林久坐未歸の客、靜かに依る熊耳の一叢叢。

第二十八則 涅槃和尚諸聖

舉す。南泉、百丈の涅槃和尚に參ず。丈問う、從上の諸聖、還た人の爲に説かざる底の法ありや。泉云く、有り。丈云く、作麼生か是れ人の爲に説かざる底の法。泉云く、不是心、不是佛、不是物。丈云く、説き了れり。泉云く、某甲は只だ恁麼、和尚は作麼生。丈云く、我れ又た是れ大善知識にあらず、爭か説くと説かざると有ることを知らん。泉云く、某甲會せず。丈云く、我れ太煞だ爾が爲に説き了れり。

祖佛從來不爲人、
衲僧今古競頭走。
明鏡當臺列像殊、
一一面南看北斗。
斗柄垂、無處討、
拈得鼻孔失却口。

祖佛は從來、人の爲にせず、衲僧は今も古も、競頭に走る。明鏡の臺に當って列像殊なり、一一南に面して北斗を看る。斗柄垂るるも、討ぬるに處無し、鼻孔を拈得えられ口を失却う。

第二十九則 大隋劫火洞然

垂示に云く、魚行げば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明らかに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ。直に當臺の明鏡、掌内の明珠に似たり。漢現り胡來たり、聲に彰れ色に顯る。且く道え、爲什麼にか此の如くなる。試みに舉し看ん。

舉す。僧大隋に問う、劫火洞然として、大千俱に壞す。未審、這箇は壞するか壞せざるか。隋云く、壞す。僧云く、恁麼ならば則ち他に隨い去かん。隋云く、他に隨い去け。

劫火光中立問端、
衲僧猶滯兩重關。
可憐一句隨他語、
萬里區區獨往還。

劫火光中に問端を立つ、衲僧猶お兩重の關に滯る。憐ずべし一句他に隨うの語、萬里區區として獨り往還す。

第三十則 趙州大蘿蔔

舉す。僧、趙州に問う、承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや。州云く、鎮州に大蘿蔔頭を出だす。

鎮州出大蘿蔔、
天下衲僧取則。
只知自古自今、
爭辨鵠白烏黒。
賊、賊、
衲僧鼻孔曾拈得。

鎮州に大蘿蔔を出だし、天下の衲僧則を取る。只だ自古自今を知るのみならば、争か辨ぜん鵠は白く烏は黒きことを。賊、賊、衲僧の鼻孔曾て拈得す。

第三十一則 麻谷振錫遶床

垂示に云く、動ずれば則ち影現れ、覺すれば則ち氷生ず。其れ或は動ぜず覺せざるも、野狐の窟裏に入るを免れず。透得徹し信得及つて、絲毫の障翳も無きときは、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫も光を生じ、把定するや眞金も色を失す。古人の公案、未だ周遮なるを免れず。且道、什麼なる邊の事をか評論する。試みに舉し看ん。

舉す。麻谷、錫を持して章敬に到る。禪床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。敬云く、是なり、是なり。雪竇著語して云く、錯てり。麻谷、又た南泉に到る。禪床を遶ること三匝、錫を振うこと一下して、卓然として立つ。泉云く、不是、不是。雪竇著語して云く、錯てり。麻谷、當時云く、章敬は是なりと道えり、和尚は爲什麼にか不是と道う。泉云く、章敬は即ち是なり、是れ汝は不是。此れは是れ風力の轉ずる所、終に敗壞を成すなり。

此錯彼錯、
切忌拈却。
四海浪平、
百川潮落。
古策風高十二門、
門門有路空蕭索。
非蕭索。
作者好求無病藥。

此の錯彼の錯、切に忌む拈却することを。四海浪平らかに、百川潮落つ。古策風高し十二門、門門路あるも空しく蕭索たり。蕭索に非ず。作者好し求めよ無病の藥を。

第三十二則 臨濟佛法大意

垂示に云く、十方坐斷して、千眼頓に開き、一句流れを截ちて、萬機寢削す。還た同死同生する底有りや。見成公案、打疊不下ならば、古人の葛藤、試みに舉し看ん。

舉す。定上座、臨濟に問う、如何なるか是れ佛法の大意。濟、禪床を下り、擒住んで一掌を與え便ち托開す。定、佇立す。傍の僧云く、定上坐、何ぞ禮拜せざる。定、禮拜するに方って、忽然と大悟す。

斷際全機繼後蹤、
持來何必在從容。
巨靈擡手無多子、
分破華山千萬重。

斷際の全機後蹤に繼がる、持ち來たること何ぞ必ずしも從容に在らん。巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重。

第三十三則 陳尚書看資福

垂示に云く、東西辨ぜず、南北分たずして、朝より暮に至り、暮より朝に至る。還た伊瞋睡すと道わんや。有る時は眼流星に似たり。還た伊惺惺と道わんや。有る時は南を呼んで北と作す。且道、是れ有心か是れ無心か、是れ道人か是れ常人か。若し箇裏に向いて透得し、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼なると恁麼ならざるとを知らん。且道、是れ什麼なる時節ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。陳操尚書、資福に看ゆ。福、來たるを見て、便ち一圓相を畫く。操云く、弟子、恁麼に來たるすら、早是に便を著ざるに、何ぞ況んや更に一圓相を畫くとは。福、便ち方丈の門を掩却す。雪竇云く、陳操は只だ一隻眼を具すと。

團團珠遶玉珊珊、
馬載驢駝上鐵船。
分付海山無事客、
釣鼈時下一圈攣。
雪竇復云、
天下衲僧跳不出。

團團として珠は遶り玉は珊珊たり、馬載驢駝、鐵船に上す。分付す海山無事の客、鼈を釣るに時に下す一圈攣。雪竇復た云く、天下の衲僧、跳け出せず。

第三十四則 仰山問甚處來

舉す。仰山、僧に問う、近ごろ甚處を離れしや。僧云く、廬山。山云く、曾て五老峰に遊ぶや。僧云く、曾て到らず。山云く、闍黎は、曾て遊山せず。雲門云く、此の語、皆な慈悲の爲の故に、落草の談あり。

出草入草、
誰解尋討。
白雲重重、
紅日杲杲。
左顧無暇、
右盼已老。
君不見寒山子、行太早。
十年歸不得、忘却來時道。

出草し入草するを、誰か解く尋討する。白雲重重、紅日杲杲。左顧いるに暇無く、右盼すれば已に老ゆ。君見ずや寒山子の、行くこと太だ早きを。十年歸り得ず、來時の道を忘却せり。

第三十五則 文殊前三三

垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、縑素を別ち、猶豫を決するに、若し是れ頂門上に眼あり、肘臂下に符あるにあらずんば、往往に當頭に蹉過わん。只だ如今見聞不昧、聲色純眞ならば、且道、是れ皂か是れ白か、是れ曲か是れ直か。這裏に到って作麼生か辨ぜん。

擧す。文殊、無著に問う、近ごろ什麼處を離れしや。無著云く、南方。殊云く、南方の佛法、如何にか住持する。著云く、末法の比丘、戒律を奉ずるもの少なり。殊云く、多少の衆ぞ。著云く、或は三百、或は五百。無著、文殊に問う、此間にては如何にか住持する。殊云く、凡聖同居、龍蛇混雜す。著云く、多少の衆ぞ。殊云く、前三三、後三三。

千峰盤屈色如藍、
誰謂文殊是對談。
堪笑清涼多少衆、
前三三與後三三。

千峰盤屈して色藍の如し、誰か謂う文殊是に對談すと。笑う堪し清涼多少の衆、前三三と後三三と。

第三十六則 長沙一日遊山

舉す。長沙、一日遊山して、歸って門首に至る。首座問う、和尚什麼處にか去き來たれる。沙云く、遊山し來たる。首座云く、什麼處にか到り來たれる。沙云く、始めは芳草に隨って去き、又た落花を逐って回る。座云く、大いに春意に似たり。沙云く、也た秋梅雨の芙蕖に滴るに勝れり。雪竇著語して云く、答話を謝す。

大地絶纖埃、
何人眼不開。
始隨芳草去、
又逐落花回。
羸鶴翹寒木、
狂猿嘯古臺。
長沙無限意。
咄。

大地纖埃を絶す、何人か眼開かざる。始めは芳草に隨って去き、又た落花を逐って回る。羸鶴寒木に翹き、狂猿古臺に嘯く。長沙限り無きの意。咄。

第三十七則 盤山三界無法

垂示に云く、掣電の機は徒らに佇思を勞し、空に當るの霹靂は耳を掩うに諧い難し。腦門の上に紅旗を播めかせ、耳の背後に雙劒を輪す。若し是れ眼辨じ手親しきにあらずんば、爭か能く構り得ん。有般底は低頭佇思、意根下にト度り、殊に知らず髑髏の前に鬼を見ること無數なるを。且道、意根に落ちず、得失に拘れず、忽し箇の恁麼に舉覺するもの有らば、作麼生か祇對せん。試みに舉し看ん。

舉す。盤山垂語して云く、三界無法、何處にか心を求めん。

三界無法、
何處求心。
白雲爲蓋、
流泉作琴。
一曲兩曲無人會、
雨過夜塘秋水深。

三界無法、何處にか心を求めん。白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作す。一曲兩曲人の會する無く、雨過ぎし夜塘に秋水深し。

第三十八則 風穴鐵牛機

垂示に云く、若し漸を論ぜば、常に返いて道に合す、鬧市裏に七縦八横。若し頓を論ぜば、朕迹を留めず、千聖も亦た摸索不著。儻或頓漸を立てずんば、又た作麼生。快人は一言、快馬は一鞭、正に恁麼なる時、誰か是れ作者なる。試みに舉し看ん。

舉す。風穴、郢州の衙内に在って上堂して云く、祖師の心印、鐵牛の機に状似たり。去れば即ち印は住し、住すれば即ち印は破す。只だ去らず住せざるが如きは、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。時に盧陂長老なるものあり、出でて問う、某甲、鐵牛の機あり、請う師、印を搭せざれ。穴云く、鯨鯢を釣って巨浸を澄ましむるに慣れて、却って嗟く蛙歩の泥沙に驤ぶことを。陂、佇思す。穴、喝して云く、長老、何ぞ進語せざる。陂、擬義す。穴、打つこと一拂子。穴云く、還た話頭を記得すや。試みに舉し看よ。陂、口を開かんと擬す。穴又た打つこと一拂子。牧主云く、佛法と王法と一般なり。穴云く、箇の什麼の道理をか見る。牧主云く、當に斷ずべくして斷ぜず、返って其の亂を招く。穴便ち下座す。

擒得盧陂跨鐵牛、
三玄戈甲未輕酬。
楚王城畔朝宗水、
喝下曾令却倒流。

盧陂を擒得えて鐵牛に跨がらせ、三玄の戈甲未だ輕しく酬いず。楚王城畔朝宗の水、喝下に曾て却って倒流せしむ。

第三十九則 雲門金毛獅子

垂示に云く、途中受用底は、虎の山に靠るに似たり。世諦流布底は、猿の檻に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀るべし。百練の精金を煅えんと欲せば、須是らく作家の爐鞴なるべし。且道、大用現前底は、什麼を將てか試験せん。

擧す。僧、雲門に問う、如何なるか是れ清淨法身。門云く、花藥欄。僧云く、便ち恁麼にし去る時、如何。門云く、金毛の獅子。

花藥欄、莫顛頂。
星在秤兮不在盤。
便恁麼、太無端。
金毛獅子大家看。

花藥欄、顛頂すること莫れ。星は秤に在りて盤に在らず。便ち恁麼にするは、太だ端無し。金毛の獅子、大家看よ。

第四十則 南泉如相似

垂示に云く、休し去り歇し去れば、鐵樹花を開く。有りや有りや、點兒落節す。直饒七縱八横なるも、他の鼻孔を穿つを免れず。且道、謫訛什麼處にか在る。試みに舉し看ん。

舉す。陸亘大夫、南泉と語話せし次、陸云く、肇法師道く、天地は我と同根、萬物は我と一體と。也た甚だ奇怪なり。南泉、庭前の花を指して、大夫を召して云く、此の一株の花を見ること、夢の如くに相似たり。

聞見覺知非一一、
山河不在鏡中觀。
霜天月落夜將半、
誰共澄潭照影寒。

聞見覺知、一一に非ず、山河は鏡中の觀に在らず。霜天月落ちて夜將に半ばならんとす、誰か共に澄潭に影を照して寒き。

第四十一則 趙州大死底人

垂示に云く、是非交結の處は、聖も亦た知る能わず。逆順縱横の時は、佛祖も辨ずる能わず。絶世超倫の士と爲り、逸群大士の能を顯す。氷凌の上を行き、劒刃の上を走くは、直下に麒麟の頭角の如く、火の裏の蓮華の似し。宛も超方なるを見て、始めて同道なるを知る。誰か是れ好手の者ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。趙州、投子に問う、大死底の人、却って活する時如何。投子云く、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。

活中有眼還同死、
藥忌何須鑑作家。
古佛尚言曾未到、
不知誰解撒塵沙。

活中に眼有れば還た死に同じ、藥忌何ぞ須いん作家を鑑するを。古佛すら尚お言う曾て未だ到らずと、知らず誰か解く塵沙を撒く。

第四十二則 龐居士好雪片片

垂示に云く、單提獨弄するは、帶水拖泥。敲唱俱に行うは、銀山鐵壁。擬義すれば即ち髑髏の前に鬼を見、尋思すれば則ち黒山の下に打坐す。明明たる杲日天に麗き、颯颯たる清風地を匝る。且道、個人還た誚訛たる處有りや。試みに舉し看ん。

舉す。龐居士、藥山を辞す。山、十人の禪客に命じて相送りて門首に至らしむ。居士、空中の雪を指さして云く、好雪、片片別處に落ちず。時に全禪客有り、云く、什麼處にか落在する。士打つこと一掌。全云く、居士也た草草なることを得ざれ。士云く、汝恁麼に禪客と稱すれば、閻老子未だ汝を放さざる在。全云く、居士は作麼生。士又た打つこと一掌。云く、眼は見るも盲の如く、口は説うも啞の如し。雪竇別して云く、初問の處に但だ雪團を握って便ち打たん。

雪團打、雪團打。
龐老機關沒可把。
天上人間不自知。
眼裏耳裏絶瀟灑。
瀟灑絶、
碧眼胡僧難辨別。

雪團もて打て、雪團もて打て。龐老の機關、把うべき沒し。天上人間、自ずから知らず。眼裏耳裏、瀟灑を絶す。瀟灑絶して、碧眼の胡僧も辨別難し。

第四十三則 洞山寒暑廻避

垂示に云く、乾坤を定むるの句は、萬世共に遵い、虎兇を擒うるの機は、千聖も辨ずる莫し。直下に更に纖翳なく、全機隨處に齊しく彰る。向上の鉗鎚を明めんと要せば、作家の爐鞴を須是つべし。且道、從上來還た恁麼なる家風あり也無。試みに舉し看ん。

舉す。僧、洞山に問う、寒暑到來せば、如何か廻避せん。山云く、何ぞ寒暑無き處に去かざる。僧云く、如何なるか是れ寒暑無き處。山云く、寒き時は闍黎を寒殺し、熱き時は闍黎を熱殺す。

垂手還同萬仞崖、
正偏何必在安排。
琉璃古殿照明月、
忍俊韓獹空上階。

垂手還って萬仞の崖に同じ、正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。琉璃の古殿に明月照き、忍俊たる韓獹も空しく階に上る。

第四十四則 禾山解打鼓

舉す。禾山垂語して云く、修學、之を聞と謂い、絶學、之を隣と謂う。此の二つを過ぐる者、是を眞過と爲す。僧出でて問う、如何なるか是れ眞過。山云く、解く鼓を打つ。又た問う、如何なるか是れ眞諦。山云く、解く鼓を打つ。又た問う、即心即佛は即ち問わず、如何なるか是れ非心非佛。山云く、解く鼓を打つ。又た問う、向上の人來たる時、如何にか接する。山云く、解く鼓を打つ。

一拽石、二般土。
發機須是千鈞弩。
象骨老師曾輓毬、
爭似禾山解打鼓。
報君知、莫莽鹵。
甜者甜兮苦者苦。

一に石を拽き、二に土を般ぶ。機を發するは須是らく千鈞の弩なるべし。象骨老師曾て毬を輓すも、爭か似かん禾山の解く鼓を打つに。君に報じて知らしめん、莽鹵なること莫れ。甜き者は甜く、苦き者は苦し。

- ①手偏に曳(ひく)
- ②車偏に毘(ころがす)

第四十五則 趙州萬法歸一

垂示に云く、道わんと要すれば便ち道いて、世を擧げて雙び無く、行ずべきには即ち行じて、全機譲らず。撃石火の如く、閃電光に似たり。疾焰過風、奔流度刃。向上の鉗鎚を拈起げられて、未だ免れず鋒を亡い舌を結ぶことを。一線の道を放って、試みに擧し看ん。

擧す。僧、趙州に問う、萬法は一に歸す、一は何處にか歸する。州云く、我青州に在りて、一領の布衫を作る。重きこと七斤。

編辟曾挨老古錐、
七斤衫重幾人知。
如今拋擲西湖裏、
下載清風付與誰。

編辟曾て挨く老古錐、七斤の衫の重さを幾人か知る。如今、西湖の裏に拋擲す、清風を下載して誰にか付與えん。

第四十六則 鏡清雨滴聲

垂示に云く、一槌にして便ち成り、凡を超え聖を越ゆ。片言もて折むべく、縛を去り粘を解く。氷凌の上を行き、劔刃の上を走くが如し。聲色堆裏に坐し、聲色頭上を行く。縦横の妙用は則ち且て置く、刹那に便ち去る時は如何。試みに舉し看ん。

舉す。鏡清、僧に問う、門外是れ什麼の聲ぞ。僧云く、雨滴の聲。清云く、衆生は顛倒して、己を迷い物を逐う。僧云く、和尚は作麼生。清云く、泊じて己を迷わず。僧云く、泊じて己を迷わざるの意旨如何。清云く、出身は猶お易かるべきも、脱體に道うは應に難かるべし。

虛堂雨滴聲、
作者難酬對。
若謂曾入流、
依前還不會。
會不會、
南山北山轉霧霏。

虛堂の雨滴の聲、作者も酬對し難し。若し曾て流れに入ると謂わば、依前として還お會せず。會するも會せざるも、南山北山轉た霧霏たり。

第四十七則 雲門六不收

垂示に云く、天何をか言わんや、四時行わる。地何をか言わんや、萬物生ず。四時の行わるる處に向いて、以て體を見るべし。且道、什麼處に向いてか衲僧を見得する。言語動用、行住坐臥を離却れ、咽喉唇吻を併却いで、還た辨得するや。

擧す。僧、雲門に問う、如何なるか是れ法身。門云く、六収まらず。

一二三四五六、
碧眼胡僧數不足。
少林謾道付神光、
卷衣又說歸天竺。
天竺茫茫無處尋、
夜來却對乳峰宿。

一二三四五六、碧眼の胡僧も數え足れず。少林謾に道う神光に付すと、衣を卷げて又た説う天竺に歸ると。天竺は茫茫として尋ぬるに處無し、夜來は却って乳峰に對して宿す。。

第四十八則 王太傅煎茶

舉す。王太傅、招慶に入りて茶を煎ず。時に朗上座、明招の與に銚を把る。朗、茶銚を翻却す。太傅見て上座に問う、茶爐下是れ什麼ぞ。朗云く、棒爐神。太傅云く、既に是れ棒爐神、爲什麼にか茶銚を翻却す。朗云く、仕官千日、失は一朝に在り。太傅、袖を拂つて便ち去る。明招云く、朗上座、招慶の飯を喫却い了るや、却って江外に去きて野檉を打す。朗云く、和尚は作麼生。招云く、非人、其の便を得たり。雪竇云く、當時但だ茶爐を踏倒さん。

來問若成風、
應機非善巧。
堪悲獨眼龍、
曾未呈牙爪。
牙爪開、生雲雷、
逆水之波經幾回。

來問は風を成すが若きも、機に應ずること善巧に非ず。悲しむ堪し獨眼龍、曾て未だ牙爪を呈せず。牙爪開かば、雲雷を生ず、逆水の波幾回をか經たる。

第四十九則 三聖以何爲食

垂示に云く、七穿八穴、鼓を撓り旗を奪う。百匝千重、前を瞻後を顧みる。虎の頭に踞り、虎の尾を収むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭沒れ、馬頭回るも、亦た未だ奇特と爲さず。且道、過量底人來る時は如何。試みに舉し看ん。

舉す。三聖、雪峰に問う、網を透る金鱗、未審、何を以てか食と爲す。峰云く、汝が網を出で來たるを待つて道わん。聖云く、一千五百人の善知識なるに、話頭すら也識らず。峰云く、老僧は住持に事繁し。

透網金鱗、
休云滯水。
搖乾蕩坤、
振鬣擺尾。
千尺鯨噴洪浪飛、
一聲雷震清颺起。
清颺起、
天上人間知幾幾。

網を透る金鱗、云うを休めよ水に滯ると。乾を搖し坤を蕩し、鬣を振り尾を擺す。千尺の鯨噴いて洪浪飛び、一聲雷震いて清颺起る。清颺起る、天上人間知んぬ幾幾ぞ。

第五十則 雲門塵塵三昧

垂示に云く、階級を度越し、方便を超絶す。機機相應じ、句句相投ず。儻し大解脱門に入り、大解脱の用を得るに非ずんば、何を以てか佛祖を權衡り、宗乘に龜鑑たらん。且道、當機直截、逆順縱横して、如何か出身の句を道い得ん。試みに請う舉し看ん。

舉す。僧、雲門に問う、如何なるか是れ塵塵三昧。門云く、鉢の裏の飯、桶の裏の水。

鉢裏飯、桶裏水。
多口阿師難下觜。
北斗南星位不殊、
白浪滔天平地起。
擬不擬、止不止、
箇箇無裨長者子。

鉢の裏の飯、桶の裏の水。多口の阿師も觜を下し難し。北斗南星位殊ならず、白浪滔天平地に起る。擬するも擬せず、止むるも止まらず、箇箇無裨の長者の子。

第五十一則 雪峰是什麼

垂示に云く、纔に是非有らば、紛然として心を失う。階級に落ちざれば、又た摸索すること無し。且道、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。這裏に到り、若し一絲毫の解路有らば、猶お言詮に滞り、尚お機境に拘われ、盡く此れ依草附木。直饒便ち獨脱の處に到るも、未だ免れず萬里に郷關を望むを。還た搆り得ずんば、且は只だ箇の現成公案を理會せよ。試みに舉し看ん。

舉す。雪峰住庵の時、兩僧有り、來たり禮拜す。峰、來たるを見て、手を以て庵門を托き、身を放って出でて云く、是れ什麼ぞ。僧も亦た云く、是れ什麼ぞ。峰、低頭て庵に歸る。僧、後に巖頭に到る。頭問う、什麼處よりか來たる。僧云く、嶺南より來たる。頭云く、曾て雪峰に到るや。僧云く、曾て到る。頭云く、何の言句か有りし。僧、前話を舉す。頭云く、他は什麼とか道いし。僧云く、他は語無く、低頭て庵に歸れり。頭云く、噫、我當初悔ゆらくは他に末後の句を道わざりしことを。若し伊に道わば、天下の人、雪老を奈何ともせず。僧、夏末に至り、再び前話を舉して請益す。頭云く、何ぞ早く問わざる。僧云く、未だ敢て容易せず。頭云く、雪峰は我と同じ條に生ると雖も、我と同じ條に死せず。末後の句を識らんと要せば、但だ這れ是なるのみ。

末後句、爲君説。
明暗雙雙底時節。
同條生也共相知、
不同條死還殊絶。
還殊絶。
黃頭碧眼須甄別。
南北東西歸去來、
夜深同看千巖雪。

末後の句、君が爲に説う。明暗雙雙、底の時節ぞ。同じ條に生ることは共に相知るも、同じ條に死せざることは還って殊絶す。還って殊絶す。黃頭と碧眼と須らく甄別すべし。南北東西歸去來、夜深けて同に看ん千巖の雪。

第五十二則 趙州石橋略約

舉す。僧、趙州に問う、久しく趙州の石橋を響うに、到來すれば只だ略約を見るのみ。州云く、汝は只だ略約のみを見て、且も石橋は見ず。僧云く、如何なるか是れ石橋。州云く、驢を渡し馬を渡す。

孤危不立道方高、
入海還須釣巨鼈。
堪笑同時灌溪老、
解云劈箭亦徒勞。

孤危を立てずして道方に高し、海に入れば還た須ずや巨鼈を釣らん。笑う堪し同時の灌溪老、解く劈箭と云うも亦た徒勞なり。

第五十三則 馬大師野鴨子

垂示に云く、徧界藏れず、全機獨露す。觸途に滯る無く、著著に出身の機あり。句下に私無く、頭頭に殺人の意あり。且道、個人は畢竟什麼處に向いてか休歇む。試みに舉し看ん。

舉す。馬大師、百丈と行きし次、野鴨子の飛び過ぐるを見る。大師云く、是れ什麼ぞ。丈云く、野鴨子。大師云く、什麼處に去くや。丈云く、飛び過ぎ去れり。大師、遂に百丈の鼻頭を扭る。丈、忍痛の聲を作す。大師云く、何ぞ曾て飛び去らん。

野鴨子、知何許。
馬祖見來相共語。
話盡山雲海月情、
依前不會還飛去。
欲飛去、却把住。
道道。

野鴨子、何許なるを知らん。馬祖見來たりて相共に語る。山雲海月の情を語り盡すも、依前として會せず還た飛び去る。飛び去らんと欲して、却って把住る。道え道え。

第五十四則 雲門近離甚處

垂示に云く、生死を透出し、機關を撥轉す。等閑に鐵を截り釘を截り、隨處に天を蓋い地を蓋う。且道、是れ什麼なる人の行履の處ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。雲門、僧に問う、近ごろ甚處を離れしや。僧云く、西禪。門云く、西禪には近日何の言句か有る。僧、兩手を展ぶ。門、打つこと一掌す。僧云く、某甲話在り。門、却って兩手を展ぶ。僧、語無し。門、便ち打つ。

虎頭虎尾一時收、
凜凜威風四百州。
却問不知何太嶮。
師云、放過一著。

虎頭虎尾一時に收む、凜凜たる威風四百州。却って問う、知らず何ぞ太だ嶮なる。師云く、一著を放過すと。

第五十五則 道吾漸源弔孝

垂示に云く、穩密全眞、當頭に取證り、涉流轉物、直下と承當す。擊石火閃電光中に向いて、誦訛を坐斷し、虎頭に據り虎尾を收むる處に於て、壁立千仞なるは則ち且て置く。一線の道を放って、還た爲人の處有り也無。試みに舉し看ん。

舉す。道吾、漸源と一家に至って弔慰す。源、棺を拍って云く、生か死か。吾云く、生とも道わじ、死とも道わじ。源云く、爲什麼にか道わざる。吾云く、道わじ、道わじ。回りて中路に至り、源云く、和尚快かに某甲が與に道え。若し道わずんば、和尚を打ち去らん。吾云く、打つことは便ち打つに任すも、道うことは即ち道わじ。源便ち打つ。

後に道吾遷化す。現、石霜に到って、前話を舉似す。霜云く、生とも道わじ、死とも道わじ。源云く、爲什麼にか道わざる。霜云く、道わじ、道わじ。源、言下に省有り。源、一日鋤子を將って法堂上を東より西に過り、西より東に過る。霜云く、什麼をか作す。源云く、先師の靈骨を覓む。霜云く、洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか覓めん。雪竇著語して云く、蒼天、蒼天。源云く、正に好し、力を著くるに。太原の孚云く、先師の靈骨、猶お在り。

兔馬有角、
牛羊無角。
絶毫絶釐、
如山如嶽。
黄金靈骨今猶在、
白浪滔天何處著。
無處著。
隻履西歸曾失却。

兔馬に角有り、牛羊に角無し。毫を絶し釐を絶して、山の如く嶽の如し。黄金の靈骨今猶お在り、白浪滔天何處にか著く。著く處無し。隻履西に歸り、曾て失却う。

第五十六則 欽山一鏃破三關

垂示に云く、諸佛曾て世に出でず、亦た一法も人に與うること無し。祖師曾て西來せず、未だ嘗て心を以て傳授せず。自是より時人了せず、外に向って馳求む。殊に知らず、自己脚跟下の一段の大事因縁、千聖も亦た摸索不著を。只だ如今見と不見、聞と不聞、説と不説、知と不知、什麼處よりか得來たる。若し未だ洞達する能わずんば、且は葛藤窟裏に向いて會取せよ。試みに舉し看ん。

舉す。良禪客、欽山に問う、一鏃もて三關を破る時、如何。山云く、關中の主を放出し看よ。良云く、恁麼ならば則ち過を知りて必ず改めん。山云く、更に何時をか待たん。良云く、好箭放つに所在に著かずと。便ち出づ。山云く、且は來たれ、闍黎。良、首を回らす。山、把住えて云く、一鏃もて三關を破ることは即ち且て止く、試みに欽山の與に箭を發し看よ。良、疑議す。山、打つこと七棒して云く、且は聽す、這の漢疑うこと三十年なるを。

與君放出關中主、
放箭之徒莫莽鹵。
取箇眼兮耳必聾、
捨箇耳兮目雙瞽。
可憐一鏃破三關、
的的分明箭後路。
君不見、玄沙有言兮、
大丈夫先天爲心祖。

君の與に放出す關中の主、箭を放つの徒、莽鹵なること莫れ。箇の眼を取れば耳必ず聾し、箇の耳を捨つれば目雙ながら瞽す。憐ずべし一鏃もて三關を破る、的的分明なり箭後の路。君見ずや、玄沙言えること有り、大丈夫は天に先だって心の祖と爲ると。

第五十七則 趙州至道無難

垂示に云く、未だ透得せざる已前は、一に銀山鐵壁の似し。透得し了るに及べば、自己は元來是れ鐵壁銀山。或は人有り、且も作麼生と問わば、但だ他に道わん、若し箇裏に向いて一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐斷して、凡聖を通さざるも、未だ分外と爲ずと。苟或未だ然らずんば、古人の様子を看取よ。

舉す。僧、趙州に問う、至道は難きこと無し、唯だ揀擇を嫌うと。如何なるか是れ不揀擇。州云く、天上天下、唯我獨尊。僧云く、此れは猶お是れ揀擇。州云く、田庫奴、什麼處か是れ揀擇。僧、語無し。

似海之深、
如山之固。
蚊虻弄空裏猛風、
螻蟻撼於鐵柱。
揀兮擇兮、當軒布鼓。

海の深さが似く、山の固きが如し。蚊虻空裏の猛風を弄し、螻蟻鐵柱を撼がす。揀び擇ぶ、當軒の布鼓。

第五十八則 趙州時人窠窟

舉す。僧、趙州に問う、至道は難きこと無し、唯だ揀擇を嫌うと。是れ時人の窠窟なりや。州云く、曾て人の我に問う有り、直得に五年分疎不下なり。

象王嘖呻、
獅子哮吼。
無味之談、
塞斷人口。
南北東西、
烏飛兔走。

象王は嘖呻り、獅子は哮吼ゆ。無味の談、人の口を塞斷ぐ。南北東西、烏飛び兔走る。

第五十九則 趙州唯嫌揀擇

垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆ。百草頭上に涅槃妙心を指出し、干戈叢裏に衲僧の命脈を點定す。且道、箇の何なる人の恩力を承けてか、便ち恁麼なるを得たる。試みに舉し看ん。

舉す。僧、趙州に問う、至道は難きこと無し、唯だ揀擇を嫌う。纔に語言有るや、是れ揀擇なりと。和尚は如何に人に爲うるや。州云く、什麼ぞ這の語を引き盡さざる。僧云く、某甲は只だ這裏に念じ到るのみ。州云く、只だこれぞ至道は難きこと無し、唯だ揀擇を嫌う。

水灑不著、
風吹不入。
虎歩龍行、
鬼號神泣。
頭長三尺知是誰、
相對無言獨足立。

水灑げども著かず、風吹けども入らず。虎のごとく歩み龍のごとく行き、鬼號び神泣く。頭の長きこと三尺、是れ誰なるを知らん、相對して無言、獨足にして立つ。

第六十則 雲門拄杖子

垂示に云く、諸佛と衆生と、本來異なること無し。山河と自己と、寧ぞ等差あらんや。爲什麼にか却って渾て兩邊と成り去る。若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷するも、放過せば即ち不可。若し放過せざれば、盡大地も一捏すら消いず。且て作麼生か是れ話頭を撥轉する處。試みに舉し看ん。

舉す。雲門、拄杖を以て衆に示して云く、拄杖子化して龍と爲り、乾坤を吞却み了れり。山河大地、甚處よりか得來たる。

拄杖子、吞乾坤。
徒説桃花浪奔。
燒尾者不在拏雲攫霧、
曝腮者何必喪膽亡魂。
拈了也。
聞不聞。
直須灑灑落落、
休更紛紛紜紜。
七十二棒且輕恕、
一百五十難放君。
師驀拈拄杖下座。
大衆一時走散。

拄杖子、乾坤を吞む、徒しく説う、桃花の浪奔ると。尾を焼く者も雲を拏え霧を攫むに在らず。腮を曝す者も何ぞ必ずしも膽を喪い魂を亡わん。拈了れり。聞くや聞かずや。直に須らく灑灑落落たるべし、更に紛紛紜紜たることを休めよ。七十二棒且は輕恕す、一百五十、君に放し難し。師、驀り①杖を拈りて座を下る。大衆一時に走り散ず。

第六十一則 風穴若立一塵

垂示に云く、法幢を建て宗旨を立つるは、他の本分の宗師に還す。龍蛇を定め緇素を別つは、須是らく作家の知識なるべし。劒刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つは、則ち且ず置く。且道、獨り寰中に據るの事、一句もて作麼生か商量えん。試みに舉し看ん。

舉す。風穴垂語して云く、若し一塵を立つれば、家國興盛し、一塵を立てざれば、家國喪亡す。雪竇、拄杖を拈げて云く、還た同生同死底の衲僧ありや。

野老從教不展繭、
且圖家國立雄基。
謀臣猛將今何在、
萬里清風只自知。

野老は從教い繭を展べすとも、且は家國に雄基を立つることを圖らん。謀臣猛將今何にか在る、萬里の清風只だ自知するのみ。

第六十二則 雲門中有一寶

垂示に云く、無師の智を以て無作の妙用を發し、無縁の慈を以て不請の勝友と作る。一句下に殺あり活あり。一機中に縦あり擒あり。且道、什麼なる人が曾て恁麼にし來たる。試みに舉し看ん。

舉す。雲門、衆に示して云く、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在す、と。燈籠を拈げて佛殿裏に向い、三門を將て燈籠上に來たらしむ。

看看、
古岸何人把釣竿。
雲冉冉、水漫漫。
明月蘆花君自看。

看よ看よ、古岸何人か釣竿を把る。雲は冉冉、水は漫漫。明月蘆花、君自ら看よ。

第六十三則 南泉兩堂爭猫

垂示に云く、意路の到らざる、正に好し提撕するに。言詮の及ばざる、宜しく急と眼を著くべし。若也電轉じ星飛ばば、便ち湫を傾け嶽を倒す。衆中に辨得す底有るなきや。試みに舉し看ん。

舉す。南泉、一日、東西の兩堂、猫兒を争う。南泉見て遂に提起して云く、道い得ば即ち斬らず。衆對なし。泉、猫兒を斬って兩段と爲す。

兩堂俱是杜禪和、
撥動煙塵不奈何。
賴得南泉能舉令、
一刀兩斷任偏頗。

兩堂俱に是れ杜禪和、煙塵を撥動して奈何ともせず。賴得に南泉能く令を舉して、一刀兩斷して偏頗に任す。

第六十四則 南泉問趙州

擧す。南泉復た前話を擧して趙州に問う。州便ち草鞋を脱ぎ、頭上に載せて出づ。南泉云く、子若し在らば、恰に猫兒を救い得てんに。

公案圓來問趙州、
長安城裏任閑遊。
草鞋頭載無人會、
歸到家山即便休。

公案圓かになり來たつて趙州に問い、長安城裏、閑遊するに任す。草鞋を頭に載す、人の會するもの無し、家山に歸り到つて即便ち休す。

第六十五則 外道問佛有無

垂示に云く、無相にして形れ、十虚に充ちて方廣たり。無心にして應じ、刹海に徧くして煩しからず。擧一明三、目機銖兩。直得棒は雨の如く點り、喝は雷の似く奔るも、也た未だ向上の人の行履に當得せざる在。且道、作麼生か是れ向上の人の事。試みに擧し看ん。

擧す。外道、佛に問う、有言を問わず、無言を問わず。世尊良久す。外道讚歎して云く、世尊の大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。外道去りし後、阿難、佛に問う、外道は何の所證有りてか、得入すと言える。佛云く、世の良馬の、鞭影を見て行くが如し。

機輪曾未轉、
轉必兩頭走。
明鏡忽臨臺、
當下分妍醜。
妍醜分兮迷雲開、
慈門何處生塵埃。
因思良馬窺鞭影、
千里追風喚得回。
喚得回、鳴指三下。

機輪曾て未だ轉ぜず、轉ずれば必ず兩頭に走らん。明鏡忽に臺に臨むや、當下に妍醜を分つ。妍醜分れて迷雲開く、慈門何處にか塵埃を生ぜん。因つて思う、良馬の鞭影を窺い、千里の追風喚び得て回ることを。喚び得て回らば、指を鳴らすこと三下す。

第六十六則 巖頭什麼處來

垂示に云く、當機觀面、陷虎の機を提げ、正按傍提、擒賊の略を布く。明に合し暗に合し、雙に放ち雙に收め、解く死蛇を弄するは、佗の作者に還す。

擧す。巖頭、僧に問う、什麼處よりか來たる。僧云く、西京より來たる。頭云く、黄巢過ぎし後、還た劒を收得せしや。僧云く、收得せり。巖頭、頸を引し近前きて云く、囚。僧云く、師の頭落ちたり。巖頭、呵呵大笑す。僧、後に雪峰に到る。峰問う、什麼處よりか來たる。僧云く、巖頭より來たる。峰云く、何の言句か有りし。僧、前話を擧す。雪峰、打つこと三十棒して趕い出す。

黄巢過後曾收劒、
大笑還應作者知。
三十山藤且輕恕、
得便宜是落便宜。

黄巢過ぎし後曾て劒を收む、大笑するは還って應に作者のみしるべし。三十の山藤且く輕恕す、便宜を得るは是れ便宜に落つるなり。

第六十七則 梁武帝請講經

舉す。梁の武帝、傳大士を請じて金剛經を講ぜしむ。大士便ち座上に於て、案を揮うこと一下して、便ち座を下る。武帝愕然たり。誌公問う、陛下還た會すや。帝云く、會せず。誌公云く、大士講經し竟んぬ。

不向雙林寄此身、
却於梁土惹埃塵。
當時不得誌公老、
也是栖栖去國人。

雙林に此の身を寄せず、却って梁土に於て埃塵を惹く。當時、誌公老を得ずんば、也た是れ栖栖と國を去る人ならん。

第六十八則 仰山問三聖

垂示に云く、天關を掀げ地軸を翻し、虎兇を擒え龍蛇を辨るは、須是らく箇の活鱖鱖の漢にして、始めて句句相投じ、機機相應ずるを得べし。且て従上來什麼なる人か合た恁麼なる。請う舉し看ん。

舉す。仰山、三聖に問う、汝の名は什麼ぞ。聖云く、慧寂。仰山云く、慧寂は是れ我なり。聖云く、我が名は慧然。仰山、呵呵大笑す。

雙收雙放若爲宗、
騎虎由來要絶功。
笑罷不知何處去、
只應千古動悲風。

雙收し雙放する若爲の宗ぞ、虎に騎るは由來絶功なるを要す。笑い罷んで知らず何處にか去る、只だ應に千古悲風を動かすのみなるべし。

第六十九則 南泉拜忠國師

垂示に云く、啗啄の處無き祖師の心印、鐵牛の機に状似たり。荊棘の林を透る衲僧家、紅爐上の一點の雪の如し。平地上に七穿八穴なることは則ち且て止き、夤縁に落ちざるは、又た作麼生。試みに舉し看ん。

舉す。南泉、歸宗、麻谷、同に去きて忠國師を禮拜せんとす。中路に至り、南泉、地上に一つの圓相を畫いて云く、道い得ば即ち去かん。歸宗、圓相の中に坐す。麻谷、便ち女人拜を作す。泉云く、恁麼ならば則ち去かじ。歸宗云く、是れ什麼たる心行ぞ。

由基箭射猿、
遶樹何太直。
千箇與萬箇、
是誰曾中的。
相呼相喚歸去來、
曹溪路上休登陟。
復云、
曹溪路坦平、爲什麼休登陟。

由基、箭もて猿を射る、樹を遶ること何ぞ太だ直なる。千箇と萬箇と、是れ誰か曾て的中てたる。相呼び相喚んで歸去來、曹溪の路上、登陟るを休めん。復た云く、曹溪の路は坦平なるに爲什麼にか登陟るを休むる。

第七十則 瀧山侍立百丈

垂示に云く、快人は一言、快馬は一鞭。萬年一念、一念萬年。直截をを知らんと要せば、未だ舉せざる已前。且道、未だ舉せざる已前、作麼生か摸索せん。請う舉し看ん。

舉す。瀧山、五峰、雲巖、共に百丈に侍立す。百丈、瀧山に問う、咽喉と唇吻を併却いで、作麼生か道わん。瀧山云く、却って請う、和尚道え。丈云く、我は汝に道を辞せざるも、已後我が兒孫を喪わんことを恐る。

却請和尚道。
虎頭生角出荒草。
十州春盡花凋殘、
珊瑚樹林日杲杲。

却って請う、和尚道え。虎頭に角を生じて荒草を出づ。十州春盡きて花凋殘み、珊瑚樹林に日は杲杲たり。

第七十一則 百丈併却咽喉

舉す。百丈、復た五峰に問う、咽喉と唇吻とを併却いで、作麼生か道う。峰云く、和尚も也た須らく併却ぐべし。丈云く、人無き處に斫額して汝を望まん。

和尚也併却、
龍蛇陣上看謀略。
令人長憶李將軍、
萬里天邊飛一鶚。

和尚も也た併却ぐべし、龍蛇陣上に謀略を看る。人をして長く李將軍を憶わしむ、萬里の天邊に一の鶚飛ぶ。

第七十二則 百丈問雲巖

舉す。百丈又た雲巖に問う、咽喉と唇吻とを併却いで、作麼生か道う。巖云く、和尚有り也未。丈云く、我が兒孫を喪えり。

和尚有也未、
金毛獅子不踞地。
兩兩三三行舊路、
大雄山下空彈指。

和尚有り也未、金毛の獅子踞地せず。兩兩三三舊路を行く、大雄山下空しく彈指す。

第七十三則 馬大師四句百非

垂示に云く、夫れ法を説くとは、説くこと無く示すこと無し。其れ法を聴くとは、聞くこと無く得ること無しと。説くも既に説くこと無く示すこと無くんば、争か説かざるに如かん。聴くも既に聞くこと無く得ること無くんば、争か聴かざるに如かん。而るに説くこと無く又た聴くこと無きも、却って些子く較えり。只だ如今諸人、山僧が這裏に在いて説くを聴くに、作麼生か此の過を免れ得ん。透關の眼を具する者、試みに舉し看よ。

舉す。僧、馬大師に問う、四句を離れ百非を絶して、請う師、某甲に西來意を直指せよ。馬師云く、我今日、勞倦たり。汝が爲に説くこと能わず。智藏に問取いに去け。僧、智藏に問う。藏云く、何ぞ和尚に問わざる。僧云く、和尚、來たり問わしむ。藏云く、我今日、頭痛す。汝が爲に説くこと能わず。海兄に問取いに去け。僧、海兄に問う。海云く、我れ這裏に到って却って會せず。僧、馬大師に舉似す。馬師云く、藏頭は白く、海頭は黒し。

藏頭白、海頭黒、
明眼衲僧會不得。
馬駒踏殺天下人、
臨濟未是白拈賊。
離四句、絶百非、
天上人間唯我知。

藏頭は白く、海頭は黒し、明眼の衲僧も會すること得ず。馬駒踏殺す天下の人、臨濟未だ是れ白拈賊にあらず。四句を離れ百非を絶す、天上人間唯だ我れのみぞ知る。

第七十四則 金牛和尚呵呵笑

垂示に云く、鎧鉾横に按えて、鋒前もて葛藤窠を翦斷る。明鏡高く懸けて、句中に毘盧印を引き出す。田地隱密の處、著衣喫飯す。神通遊戲の處、如何が湊泊せん。還た委悉すや。下文を看取よ。

擧す。金牛和尚、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て僧堂の前に舞を作り、呵呵大笑して云く、菩薩子、飯を喫し來たれと。雪竇云く、此の如くなりと雖然も、金牛は是れ好心ならず。僧、長慶に問う、古人道く、菩薩子、飯を喫し來たれとは、意旨如何。慶云く、齋に因って慶讃するに大いに似たり。

白雲影裏笑呵呵、
兩手持來付與他。
若是金毛獅子子、
三千里外見譚訛。

白雲の影裏に笑うこと呵呵、兩手に持ち來たりて他に付與す。若是金毛の獅子子ならば、三千里外に譚訛を見ん。

第七十五則 烏臼問法道

垂示に云く、靈鋒の寶劔、常に現前に露る。亦た能く人を殺し、亦た能く人を活す。彼に在り此に在り、同に得同に失う。若し提持せんと要せば、一に提持するに任す。若し平展せんと要せば、一に平展するに任す。且道、賓主に落ちず、回互に拘らざる時は如何。試みに舉し看ん。

舉す。僧、定州和尚の會裏より來りて烏臼に到る。烏臼問う、定州の法道、這裏と何似。僧云く、別ならず。臼云く、若し別ならずんば、更に彼中に轉じ去れ。便ち打つ。僧云く、棒頭に眼有り、草草に人を打つこと不得れ。臼云く、今日、一箇を打著せり。又た打つこと三下す。僧便ち出で去る。臼云く、屈棒を元來人の喫すること有る在。僧、身を轉じて云く、爭奈せん杓柄は和尚の手の裏に在り。臼云く、汝若し要せば、山僧汝に回與さん。僧近前つて臼の手中の棒を奪い、臼を打つこと三下す。臼云く、屈棒、屈棒。僧云く、人の喫すること有る在。臼云く、草草に箇の漢を打著す。僧、便ち禮拜す。臼云く、却つて恁麼にし去れり。僧大笑して出づ。臼云く、恁麼を消得す、恁麼を消得す。

呼即易、遣即難。
互換機鋒子細看。
劫石固來猶可壞。
滄溟深處立須乾。
烏臼老、烏臼老、幾何般。
與他杓柄太無端。

呼ぶは即ち易く、遣るは即ち難し。互換の機鋒子細に看よ。劫石は固くし來たるも猶お壞すべし、滄溟深き處も立ちどころに須らく乾くべし。烏臼老、烏臼老、幾何般ぞ。他に杓柄を與うること太だ端なり。

第七十六則 丹霞問甚麼來

垂示に云く、細かきことは米末の如く、冷たきことは氷霜に似たり。乾坤に逼塞して、明を離れ暗を絶す。低低の處も之を觀れば餘りあり、高高の處も之を平ぐれば足らず。把住と放行と、總て這の裏許に在り。還た出身の處有り也無。試みに舉し看ん。

舉す。丹霞、僧に問う、甚麼よりか來たる。僧云く、山の下より來たる。霞云く、飯を喫し了る也未。僧云く、飯を喫し了れり。霞云く、飯を將ち來たりて汝に喫せしめし底の人、還た眼を具せしや。僧、語無し。

長慶、保福に問う、飯を人に喫せしむるは、恩を報ゆるに分有り。爲什麼にか眼を具せざる。福云く、施す者と受く者と、二り俱に瞎漢なり。長慶云く、其の機を盡し來たるに、還た瞎と成る否。福云く、我は瞎す、と道いて得しきや。

盡機不成瞎、
按牛頭喫草。
四七二三諸祖師、
寶器持來成過咎。
過咎深、無處尋。
天上人間同陸沈。

機を盡さば瞎と成らずと、牛の頭を按えて草を喫せしむ。四七二三の諸祖師、寶器を持ち來たりて過咎を成す。過咎深く、尋ぬるに處無し。天上人間同じく陸沈す。

第七十七則 雲門答餠餅

垂示に云く、向上に轉じ去かば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし。鶻の鳩を捉うるが似し。向下に轉じ去かば、自己の鼻孔は別人の手の裏に在り。龜の殻に藏るるが如し。箇中に忽し箇の出で來たりて、本來向上も向下も無し、轉ずるを用て什麼か作んと道うもの有らば、只だ伊に道わん、我も也た知る、爾が鬼窟裏に活計を作せるをと。且道、作麼生か箇の縊素を辨ぜん。良久して云く、條有れば條に攀り、條無ければ例に攀る。試みに舉し看ん。

舉す。僧、雲門に問う、如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く、餠餅。

超談禪客問偏多、
縫罽披離見也麼。
餠餅埜來猶不住、
至今天下有譎訛。

超談の禪客問うこと偏に多し、縫罽披離たるを見るや。餠餅埜來みて猶お住めず、今に至るも天下に譎訛有り。

第七十八則 十六開士入浴

擧す。古え十六の開士有り、浴僧の時に、例に随って入浴するや、忽と水因を悟る。諸禪徳、作麼生か他の妙觸宣明、成佛子住と道えるを會する。也た須らく七穿八穴して始めて得し。

了事衲僧消一箇、
長連牀上展脚臥。
夢中曾説悟圓通、
香水洗來薰面唾。

了事の衲僧一箇を消う、長連牀上に脚を展べて臥す。夢中に曾て説く圓通を悟ると、香水もて洗い來たらば薰面に唾せん。

第七十九則 投子一切聲

垂示に云く、大用現前して、軌則を存せず。活捉生擒して、餘力を勞せず。且道、是れ什麼なる人か曾て恁麼にし來たる。試みに舉し看ん。

舉す。僧、投子に問う、一切の聲は是れ佛の聲と、是なり否。投子云く、是なり。僧云く、和尚、尿沸碗鳴聲すること莫れ。投子、便ち打つ。又た問う、麤言及び細語、皆第一義に歸すと、是なり否。投子云く、是なり。僧云く、和尚を喚んで一頭の驢と作して得しきや。投子、便ち打つ。

投子投子、機輪無阻。
放一得二、同彼同此。
可憐無限弄潮人、
畢竟還落潮中死。
忽然活、
百川倒流鬧潑潑。

投子、投子、機輪阻むもの無し。一を放って二を得たり、彼に同じく此に同じ。憐むべし限り無き潮を弄する人、畢竟還た潮の中に落ちて死す。忽然活せば、百川倒に流れて鬧潑潑たらん。

第八十則 趙州孩子六識

舉す。僧、趙州に問う、初生の孩子是還た六識を具する也無。趙州云く、急水上に毬子を打つ。僧、復た投子に問う、急水上に毬子を打つと、意旨は如何。子云く、念念、流れを停めず。

六識無功伸一問、
作家曾共辨來端。
茫茫急水打毬子、
落處不停誰解看。

六識無功一問を伸ぶ、作家曾て共に來端を辨ず。茫茫たる急水に毬子を打つ、落處停まらず、誰か解く看ん。

第八十一則 藥山射塵中塵

垂示に云く旗を攙り鼓を奪うは千聖も窮むること莫し。譎訛を坐斷して、萬機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦た本體如然に非ず。且道、箇の什麼に憑ってか、恁麼に奇特なるを得たる。

擧す。僧、藥山に問う、平田淺草に、塵と鹿と群を成す。如何か塵中の塵を射得ん。山云く、箭を看よ。僧、身を放って便ち倒る。山云く、這の死漠を拖出せ。僧、便ち走す。山云く、泥團を弄する漠、什麼の限りか有らん。雪竇拈げて云く、三步は活すと雖も、五歩は須らく死すべし。

塵中塵、君看取。
下一箭、走三步。
五歩若活、成群趁虎。
正眼從來付獵人。
雪竇高聲云、竿看箭。

塵中の塵、君、看取せよ。
一箭を下うれば、走すこと三步。
五歩にして若し活せば、群を成して虎を趁わん。
正眼は從來獵人に付う。
雪竇高聲に云く、箭を看よ。

第八十二則 大龍堅固法身

垂示に云く、竿頭の絲線は、具眼にして方めて知る。格外の機は、作家にして方めて辨ず。且道、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機。試みに舉し看ん。

舉す。僧、大龍に問う、色身は敗壞す、如何なるか是れ堅固法身。龍云く、山花開いて錦に似、澗水湛えて藍の如し。

問曾不知、答還不會。
月冷風高、古巖寒桧。
堪笑路逢達道人、
不將語默對。
手把白玉鞭、
驪珠盡擊碎。
增瑕類。
國有憲章、三千條罪。

問うこと曾て知らず、答うること還た會くせず。
月冷かにして風高く、古巖に寒桧あり。
笑う堪し、路に達道の人に逢わば、
語默を將て對せずとは。
手に白玉の鞭を把り、
驪珠盡く擊碎かん。
瑕類を増さん。
國に憲章有りて、三千條の罪あり。

第八十三則 雲門露柱相交

舉す。雲門、衆に示して云く、古佛は露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。自ら代って云く、南山に雲起こり、北山に雨下る。

南山雲、北山雨。
四七二三相観。
新羅國裏曾上堂、
大唐國裏未打鼓。
苦中樂、樂中苦。
誰道黄金如糞土。

南山の雲、北山の雨。
四七と二三と面のあたりに相観る。
新羅國裏曾て上堂するに、
大唐國裏未だ鼓を打たず。
苦中の樂、樂中の苦。
誰か道う黄金も糞土の如しと。

第八十四則 維摩不二法門

垂示に云く、是と道うも是の是とすべき無く、非と言うも非の非とすべき無し。是非已に去り、得失兩つながら忘るれば、淨皚皚、赤灑灑。且道、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の衲僧の出で來たる有りて道わん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈と。且道、此の人還た眼を具する也無。若し此の人を辨得せば、爾に許む親しく古人に見え來たれりと。

擧す。維摩詰、文殊師利に問う、何等か是れ菩薩、不二の法門に入るとは。文殊曰く、我が意の如きは、一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離る。是を不二の法門に入ると爲す。是に於て文殊師利、維摩詰に問う、我等各自説き已る。仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩、不二の法門に入るとはと。

雪竇云く、維摩は什麼と道いしぞ。復た云く、勘破了せり。

咄、這維摩老、
悲生空懊惱。
臥疾毘耶離、
全身太枯槁。
七佛祖師來、
一室且頻掃。
請問不二門、
當時便靠倒。
不靠倒。
金毛獅子無處討。

咄、這の維摩老、
生を悲んで空しく懊惱す。
疾に毘耶離に臥し、
全身ただ枯槁たり。
七佛の祖師來たる、
一室且は頻りに掃う。
不二の門を請問せられ、
當時便ち靠倒さる。
靠倒されず。
金毛の獅子討ぬるに處無し。

第八十五則 桐峰庵主大蟲

垂示に云く、世界を把定んで、纖毫も漏らさず、盡大地の人、鋒を亡い舌を結ぶ、是れ衲僧の正令なり。頂門に光を放ち、四天下を照破す、是れ衲僧の金剛眼睛なり。鐵を點じて金と成し、金を點じて鐵と成し、忽ちに近忽ちに縦つ、是れ衲僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐斷して、直得に氣を出だす處無く、倒退三千里ならしむ、是れ衲僧の氣宇なり。且道、總て恁麼ならざる時、畢竟是れ箇の什麼なる人ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。僧、桐峰庵主の處に到って便ち問う、這裏に忽し大蟲に逢わん時、又た作麼生。庵主、便ち虎の聲を作す。僧便ち怕るる勢を作す。庵主、呵呵大笑す。僧云く、箇の老賊。庵主云く、老僧を爭奈何せん。僧、休し去る。

見之不取、
思之千里。
好箇斑斑、
爪牙未備。
君不見、
大雄山下忽相逢、
落落聲光皆振地。
大丈夫、見也無、
收虎尾兮捋虎鬚。

之を見て取らざれば、
之を思ふこと千里ならん。
好箇き斑斑なるも、
爪牙未だ備わらず。
君見ずや、
大雄山下に忽と相逢い、
落落たる聲光皆な地に振うを。
大丈夫、見る也無、
虎尾を收め虎鬚を捋くを。

第八十六則 雲門有光明在

垂示に云く、世界を把定んで、絲毫も漏らさず。衆流を截斷つて、涓滴も存さず。口を開けば便ち錯ち、擬議えば即ち差う。且道、作麼生か是れ透關底眼。試みに道い看ん。

擧す。雲門、垂語して云く、人人盡く光明の在る有り。看る時は見えず暗昏昏たり。作麼生か是れ諸人の光明。自ら代つて云く、厨庫、三門。又た云く、好事は無きに如かず。

自照列孤明、
爲君通一線。
花謝樹無影、
看時誰不見。
見不見、
倒騎牛兮入佛殿。

自ら照らして孤明を列ね、
君が爲に一線を通ず。
花謝りて樹に影無し、
看る時誰にか見えざる。
見ゆるや見えざるや、
倒に牛に騎つて佛殿に入るを。

第八十七則 雲門藥病相治

垂示に云く、明眼の漢に窠臼沒し。有る時は孤峰頂上にて草漫漫、有る時は鬧市裏頭にて赤灑灑。忽若忿怒れる那吒とならば、三頭六臂を現し、忽若日面月面とならば、普攝き慈光を放ち、一塵に一切身を現し、隨類の人と爲って、泥に和し水に合す。忽若向上の竅を撥著かば、佛眼も也た覷ること著ず。設使千聖出頭し來たるも、也た須らく倒退三千里すべし。還た同得同證の者有りや。試みに舉し看ん。

舉す。雲門、衆に示して云く、藥病相治す。盡大地是れ藥。那箇か是れ自己。

盡大地是藥、
古今何太錯。
閉門不造車、
通途自寥廓。
錯錯。
鼻孔遼天亦穿却。

盡大地是れ藥、
古今何ぞ太だ錯れる。
門を閉じて車を造らず、
通途自ずから寥廓たり。
錯、錯。
鼻孔遼天たるも亦た穿却たれたり。

第八十八則 玄沙接物利生

垂示に云く、門庭の施設は、且は恁麼に二を破して三と作す。入理の深談は、也た須是らく七穿八穴すべし。當機敲點して、金鎖玄關を擊碎く。令に據って行い、直得に蹤を掃い跡を滅す。且道、譎訛什麼處にか在る。頂門の眼を具する者、請う試みに舉し看よ。

舉す。玄沙、衆に示して云く、諸方の老宿は盡く道う、接物利生と。忽し三種の病人の來たるに遇わば、作麼生か接せん。盲を患う者は、鎚を拈り拂を豎つるも、他又た見えぬ。聾を患う者は、語言三昧するも、他又た聞こえず。啞を患う者は、伊をして説わしむるも、又た説い得ず。且て作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法は靈驗なしと。

僧、雲門に請益す。雲門云く、汝禮拜著。僧、禮拜して起つ。雲門、拄杖を以て拈く。僧、退後る。門云く、汝は是れ盲を患わず。復た喚ぶ、近前み來たれ。僧、近前づ。門云く、汝は是れ聾を患わず。門、乃ち云く、還た會すや。僧云く、會せず。門云く、汝は是れ啞を患わず。僧此に於て省る有り。

盲聾啞、杳絶機宜。

天上天下、堪笑堪悲。

離婁不辨正色、師曠豈識玄絲。

爭如獨坐虛窓下、葉落花開自有時。

復云、

還會也無、無孔鐵鎚。

盲聾啞、杳として機宜を絶す。

天上天下、笑う堪し、悲しむ堪し。

離婁は正色を辨ぜず、師曠は豈に玄絲を識らんや。

爭か如かん虚窓の下に獨坐し、葉落ち花開いて自ずから時有るに。

復た云く、

還た會す也無、無孔の鐵鎚。

第八十九則 雲巖問道吾手眼

垂示に云く、通身是れ眼なるも見到らず、通身是れ耳なるも聞き及ばず、通身是れ口なるも説い著せず、通身是れ心なるも鑑み出せず。通身は即ち且て止き、忽若眼無くんば作麼生か見ん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か説わん、心無くんば作麼生か鑑みん。若し箇裏に向いて一線の道を撥轉き得ば、便ち古佛と同參なり。參は則ち且く止く、且道、箇の什麼なる人にか參ぜん。

擧す。雲巖、道吾に問う、大悲菩薩は許多の手眼を用いて、什麼をか作す。吾云く、人の夜半に背手して枕子を摸るが如し。巖云く、我會せり。吾云く、汝作麼生か會す。巖云く、偏身是れ手眼なり。吾云く、道うことは即ち太煞だ道うも、只だ八成を道い得たるのみ。巖云く、師兄は作麼生。吾云く、通身是れ手眼なり。

偏身是、通身是。
拈來猶較十万里。
展翅鵬騰六合雲、
搏風鼓蕩四溟水。
是何埃壒兮忽生、
那箇毫釐兮未止。
君不見、
網珠垂範影重重、
棒頭手眼從何起。
咄。

偏身是か、通身是か。
拈げ來たれば猶お十万里を較つ。
翅を展げて鵬騰す六合の雲、
風を搏って鼓蕩す四溟の水。
是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、
那箇の毫釐ぞ未だ止まざる。
君見ずや、
網珠、範を垂れて影重重たるを、
棒頭の手眼何よりか起る。
咄。

第九十則 智門般若體

垂示に云く、聲前の一句は、千聖も傳えず。面前の一絲は、長時無間なり。淨皜皜、赤灑灑。頭は鬢鬆、耳は卓朔。且道、作麼生。試みに舉し看ん。

舉す。僧、智門に問う、如何なるか是れ般若の體。門云く、蚌、名月を含む。僧云く、如何なるか是れ般若の用。門云く、兔子懷胎す。

一片虛凝絶謂情、
人天從此見空生。
蚌含玄兔深深意、
曾與禪家作戰爭。

一片の虚凝、謂情を絶し、
人天此れより空生を見る。
蚌、玄兔を含む深深たる意、
曾て禪家と戦争を作す。

第九十一則 鹽官犀牛扇子

垂示に云く、情を超え見を離れ、縛を去り粘を解き、向上の宗乗を提起し、正法眼藏を扶堅すには、也た須らく十方齊しく應じ、八面玲瓏として、直に恁麼なる田地に到るべし。且道、還た同得同證、同死同生する底有りや。試みに舉し看ん。

舉す。鹽官、一日、侍者を喚ぶ、我が與に犀牛の扇子を將ち來たれ。侍者云く、扇子破れたり。官云く、扇子既に破れたれば、我に犀牛兒を還し來たれ。侍者對ること無し。投子云く、將き出だすことを辞せざるも、恐らくは頭角全からざらん。雪竇拈げて云く、我は全からざる底の頭角を要す。石霜云く、若し和尚に還さば即ち無からん。雪竇拈げて云く、犀牛兒は猶お在り。資福、一圓相を畫き、中に一つの牛の字を書く。雪竇拈げて云く、適來、爲什麼にか將き出ださざる。保福云く、和尚は年尊し、別に人に請えば好し。雪竇拈げて云く、惜しむべし、勞して功無し。

犀牛扇子用多時、
問著元來總不知。
無限清風與頭角、
盡同雲雨去難追。

犀牛の扇子用うること多時、
問著れば元來總な知らず。
限り無き清風と頭角と、
盡く雲雨と同一に去って追ひ難し。

第九十二則 世尊一日陞座

垂示に云く、絃を動くや曲を別く、千載にも逢い難し。兎を見て鷹を放つ、一時に俊を取る。一切の語言を總べて一句と爲し、大千沙界を攝めて一塵と爲す。同死同生、七穿八穴。還た證據する者ありや。試みに舉し看ん。

舉す。世尊、一日、座に陞る。文殊、白槌して云く、法王の法を諦觀せよ、法王の法は是の如しと。世尊、便ち座を下る。

列聖叢中作者知、
法王法令不如斯。
會中若有仙陀客、
何必文殊下一槌。

列聖叢中作者は知る、
法王の法令は斯の如くならざるを。
會中若し仙陀の客有らば、
何ぞ文殊の一槌を下すを必せん。

第九十三則 大光師作舞

舉す。僧、大光に問う、長慶道く、齋に因つて慶讃すと。意旨如何。大光、舞を作す。僧、禮拜す。光云く、箇の什麼を見てか、便ち禮拜する。僧、舞を作す。光云く、這の野狐精。

前箭猶輕後箭深、
誰云黃葉是黃金。
曹溪波浪如相似、
無限平人被陸沈。

前の箭は猶お輕きも後の箭は深し、
誰か云う黄葉は是れ黄金と。
曹溪の波浪如し相似たれば、
限り無き平人は陸沈せられん。

第九十四則 楞嚴經若見不見

垂示に云く、聲前の一句は、千聖も傳えず。面前の一絲は、長時無間なり。淨髣髴、赤灑灑、露地の白牛。眼卓朔、耳卓朔、金毛の獅子は則ち且て置く。且道、作麼生か是れ露地の白牛。

擧す。楞嚴經に云く、吾れ見ざる時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見れば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざると。

全象全牛譬不殊、
從來作者共名模。
如今要見黃頭老、
刹刹塵塵在半途。

全象全牛譬なるは殊ならず、
從來作者も共に名模す。
如今黃頭老を見んと要せば、
刹刹塵塵、半途に在り。

第九十五則 長慶有三毒

垂示に云く、有佛の處は住まること不得れ、住著まれば頭角生ず。無佛の處は急ぎ走過ぎよ、走過ぎざれば草深きこと一丈。直饒淨裸裸、赤灑灑にして、事外に機無く、機外に事無きも、未だ株を守りて兔を待つを免れず。且道、總て恁麼ならざれば、作麼生か行履せん。試みに舉し看ん。

舉す。長慶有る時云く、寧ろ阿羅漢に三毒有りと説うも、如來に二種の語有りと説わず。如來に語無しとは道わず、只だ是れ二種の語無し。保福云く、作麼生か是れ如來の語。慶云く、聾人爭か聞くを得ん。保福云く、情に知れり、爾が第二頭に向いて道うを。慶云く、作麼生か是れ如來の語。保福云く、喫茶去。

頭兮第一第二、
臥龍不鑑止水。
無處有月波澄、
有處無風浪起。
稜禪客、稜禪客、
三月禹門遭點額。

頭たり第一第二、
臥龍は止水に鑑さず。
無き處には月は有って波澄み、
有る處には風無くして浪起る。
稜禪客、稜禪客、
三月の禹門、點額に遭わん。

第九十六則 趙州三轉語

舉す。趙州、衆に三轉語を示す。

泥佛不渡水、
神光照天地。
立雪如未休、
何人不雕偽。

金佛不渡鑪、
人來訪紫胡。
牌中數箇字、
清風何處無。

木佛不渡火、
常思破竈墮。
杖子忽擊著、
方知辜負我。

泥佛は水を渡らず、
神光、天地を照す。
雪に立つこと如し未だ休めざれば、
何人か雕偽せざらん。

金佛は鑪を渡らず、
人來たりて紫胡を訪う。
牌の中の數箇の字、
清風、何處にか無からん。

木佛は火を渡らず、
常に思う破竈墮。
杖子もて忽ち擊著うるや、
方めて知れり、我に辜負けるを。

第九十七則 金剛經輕賤

垂示に云く、一を拈って一を放つは、未だ是れ作家ならず。一を擧げて三を明らむるも、猶お宗旨に乖く。直得い天地陡かに變じ、四方絶唱し、雷奔り電馳せ、雲行き雨驟に、湫を傾け嶽を倒し、甕瀉ぎ盆傾くも、也た未だ一半すら提得せざる在。還た解く天關を轉じ、能く地軸を移す底有りや。試みに擧し看ん。

擧す。金剛經に云く、若し人に輕賤められなば、是の人は先世の罪業ありて、應に惡道に墮すべきを、今世の人の輕賤むるを以ての故に、先世の罪業は、則ち爲に消滅す。

明珠在掌、
有功者賞。
胡還不來、
全無伎倆。
伎倆既無、
波旬失途。
瞿曇瞿曇、
識我也無。
復云、
勘破了也。

明珠は掌に在り、
功有る者は賞す。
胡還來たらざれば、
全く伎倆無し。
伎倆既に無くして、
波旬も途を失う。
瞿曇、瞿曇、
我を識る也無。
復た云く、
勘破了せり。

第九十八則 天平和尚兩錯

垂示に云く、一夏嘮嘮と葛藤を打び、幾乎ど五湖の僧を絆倒かす。金剛の寶劔もて當頭に截り、始めて覺く、從來百不能なることを。且道、作麼生か是れ金剛の寶劔。眉毛を眨上して、試みに請う鋒鋦を露し看よ。

擧す。天平和尚行脚しおりし時、西院に參ず。常に云く、佛法を會するは莫道、箇の擧話の人を覓むるも也た無しと。一日、西院遙かに見て召して云く、從滄。平、頭を擧ぐ。西院云く、錯。平、行くこと三兩歩す。西院又た云く、錯。平、近前る。西院云く、適來の這の兩錯、是れ西院の錯か、是れ上座の錯か。平云く、從滄の錯なり。西院云く、錯。平、休去る。西院云く、且は這裏に在いて夏を過せ。待に上座と這の兩錯を商量せんと。平、當時ち便ち行く。

後に住院して、衆に謂いて云く、我當初、行脚しおりし時、業風に吹かれて、思明長老の處に到るや、連けざまに兩錯を下して、更に我を留めて夏を過し、待に我と商量せんとせらる。我恁麼の時は錯と道わざりしも、我南方に發足し去りし時には、早に錯なることを知道り了れりと。

禪家流、愛輕薄。
滿肚參來用不著。
堪悲堪笑天平老、
却謂當初悔行脚。
錯錯、
西院清風頓銷鑠。
復云、
忽有箇衲僧、出云錯、
雪竇錯何似天平錯。

禪家流、輕薄を愛す。
滿肚に參じ來たるも用い著せず。
悲しむ堪し笑う堪し天平老、
却って謂う當初悔ゆらくは行脚せしことを。
錯、錯、
西院の清風頓に銷鑠せり。
復た云く、
忽し箇の衲僧有り、出でて錯と云わば、
雪竇の錯は天平の錯に何似ぞ。

第九十九則 肅宗十身調御

垂示に云く、龍吟りて霧起り、虎嘯えて風生ず。出世の宗猷は金玉相振い、通方の作略は箭鋒相拄る。徧界藏さず、遠近齊しく彰れ、古今明らかに辨ず。且道、是れ什麼なる人の境界ぞ。試みに舉し看ん。

舉す。肅宗帝、忠國師に問う、如何なるか是れ十身調御。國師云く、檀越、毘盧の頂上を蹈み行け。帝云く、寡人會せず。國師云く、自己の清淨法身を認むること莫れ。

一國之師亦強名、
南陽獨許振嘉聲。
大唐扶得眞天子、
曾蹈毘盧頂上行。
鐵鎚擊碎黄金骨、
天地之間更何物。
三千刹海夜沈沈、
不知誰入蒼龍窟。

一國の師も亦た強いて名づく、
南陽獨り許す、嘉聲を振うを。
大唐扶け得たり眞の天子、
曾て毘盧の頂上を蹈んで行く。
鐵鎚もて撃砕く黄金の骨、
天地の間に更に何物ぞ。
三千の刹海夜沈沈、
知らず誰か蒼龍の窟に入る。

第百則 巴陵吹毛劒

垂示に云く、因を收め果を結び、始めを盡し終りを盡す。對面するに私無く、元より曾て説かず。忽し箇の出で來たりて、一夏請益するに、爲什麼にか曾て説かざると道うもの有らば、爾の悟り來たるを待つて、爾に道わん。且道、爲復是れ當面して諱却るか、爲復別に長處有るか。試みに舉し看ん。

舉す。僧、巴陵に問う、如何なるか是れ吹毛劒。陵云く、珊瑚は枝枝に月を撐著う。

不平を平めんと要して、
大巧は拙なるが若し。
或は指し或は掌して、
天に倚りて雪を照らす。
大冶も磨礪ぎ下せず、
良工も拂拭すること未だ歇めず。
別なり、別なり。
珊瑚は枝枝に月を撐著う。